

かとうだひがしばるいせき
方保田東原遺跡(7)

だいどう
大道小学校における発掘調査報告書

2006

熊本県山鹿市教育委員会

か と う だ ひがし ばる い せき
方保田東原遺跡(7)

だ い どう
大道小学校における発掘調査報告書

2006

熊本県山鹿市教育委員会



1

家形土器



2

扉部分

序 文

平成の大合併により山鹿市も旧山鹿市、鹿北町、菊鹿町、鹿本町、鹿央町の1市4町が一つになりました。山鹿の地名は平城京出土の木簡にも「肥後国山鹿郡」として書かれ、すでに奈良時代には確立していたことが明らかになっております。このような土地柄で本市には数多くの文化財が残されており、特に史跡チブサン古墳をはじめ装飾古墳は質の高さと数の多さで全国有数です。このほかに各時代の遺跡も各地に残されております。

本市では文化財の多い場所であるため、公共事業や民間開発に伴って発掘調査も数多く行われてきました。

しかしながら開発を急ぐあまり、発掘調査後の整理作業に従事する人材はもとより時間と予算の確保が出来ないまま今日に至っております。

新市になり、今年度からこれまで整理作業が出来なかったものについて逐次報告書の作成を行うこととし、本書はその第1号となるものです。

平成4年度と平成10年度に大道小学校において体育館改築工事およびプール改築工事に伴う発掘調査を実施したものを収めております。

本書がこの遺跡で暮らした人々の息吹を少しでも皆様に伝える事が出来れば幸いに存じます。

平成18年12月1日

山鹿市教育長 田 中 宏

凡 例

- 1 本書は山鹿市教育委員会が市立大道小学校において平成4年度に実施した体育館改築工事及び平成10年度に実施したプール改築工事に伴う発掘調査報告書である。
- 2 本調査は山鹿市教育委員会学務課及び教育総務課の委託により文化課文化財係および山鹿市立博物館文化財調査係において実施した。
- 3 整理作業は山鹿市出土文化財管理センターにおいて行った。
- 4 遺物の一部は博物館で展示している。その他の遺物と図面類は全て出土文化財管理センターで保管している。
- 5 本書に掲載した写真は中村幸史郎が撮影した。なお、遺物写真右下の数字は実測図遺物番号である。
- 6 本書に使用した遺物は城葉子、小原朱実、大森よう子、野満彰子と中村が実測した。
- 7 本書の執筆及び編集は中村が行った。

本文目次

I はじめに	1	(2) 2号土坑	36
II 過去の調査成果	1	(3) 3号土坑	38
III 大道小学校建設及び改修の記録	1	(4) 4号土坑	40
IV 大道小学校に残された記録	3	(5) 5号土坑	40
V 遺跡の立地・地形	8	5 溝状遺構の調査	40
VI 体育館改築工事に伴う調査（平成4年度）	8	(1) 1号溝	40
1 調査の経過	8	(2) 2号溝	43
1 調査に至る経過	8	6 その他の遺構の調査	45
2 調査の目的	8	(1) 建物跡	45
3 調査の組織	9	7 遺物	46
4 調査の経過	9	(1) 3号変棺北側ビット出土遺物	46
5 調査区の設定	15	(2) 遺構に伴わない遺物	46
2 調査の成果	15	① 体育館西側調査区出土の遺物	46
1 変棺の調査	15	② 体育館下調査区出土の遺物	49
(1) 1号変棺	15	③ 体育館東側調査区出土の遺物	49
(2) 2号変棺	15	④ 一括資料	52
(3) 3号変棺	16	⑤ 縄文土器	52
(4) 4号変棺	19	8 まとめ	54
(5) 5号変棺	19	VII プール改築工事に伴う調査（平成10年度）	55
(6) 6号変棺	21	1 調査の経過	55
(7) 7号変棺	22	1 調査に至る経過	55
(8) 8号変棺	23	2 調査の経過	55
(9) 9号変棺	24	3 調査の組織	56
(10) 10号変棺	25	2 調査の成果	60
(11) 11号変棺	25	1 調査の概要	60
(12) 12号変棺	28	2 遺構と遺物	60
(13) 13号変棺	28	(1) 土器溜め	60
2 木棺墓の調査	30	(2) 1号土坑	68
(1) 木棺墓	30	(3) 2号土坑	69
3 住居跡の調査	30	(4) 3号土坑	72
(1) 1号住居跡	30	(5) 4号土坑	73
(2) 3号住居跡	33	(6) 溝状遺構	73
4 土坑の調査	34	(7) 遺構に伴わない遺物	76
(1) 1号土坑	34	3 考察	80

挿図目次

体育館改築工事に伴う調査（平成4年度）

第1図 体育館建設時出土遺物実測図（昭和44年）①…2

第2図 体育館建設時出土遺物実測図（昭和44年）②…3

第3図 校舎配置図（昭和20年代）…4

第82図	2号土坑上層実測図	70
第83図	2号土坑下層・断面実測図	70
第84図	2号土坑出土遺物実測図①	71
第85図	2号土坑出土遺物実測図②	72
第86図	3号土坑上・下層・断面実測図	72
第87図	3号土坑出土遺物実測図	73
第88図	4号土坑実測図	74

第89図	4号土坑出土遺物実測図	74
第90図	溝状遺構実測図	75
第91図	溝状遺構出土遺物実測図	76
第92図	遺構に伴わない遺物実測図①	76
第93図	遺構に伴わない遺物実測図②	77
第94図	遺構に伴わない遺物実測図③	78
第95図	遺構に伴わない遺物実測図④	79

図 版 目 次

体育館改築工事に伴う調査（平成4年度）

巻頭図版 1 家形土器

2 扉部分拡大

PL 1	1 体育館東区全景	83
	2 体育館内部（南側）	83
	3 体育館内部（北側）	83
	4 1号甕棺出土状況	83
	5 2号甕棺出土状況	83
	6 3号（右）・4号（左）甕棺出土状況	83
	7 4号甕棺出土状況	83
	8 5号甕棺出土状況	83
PL 2	1 6号甕棺出土状況	84
	2 8号甕棺出土状況	84
	3 9号甕棺出土状況	84
	4 10号甕棺出土状況	84
	5 11号甕棺・木棺墓上面検出状況	84
	6 11号甕棺出土状況（南から）	84
	7 11号甕棺出土状況（東から）	84
	8 11号甕棺内貝輪出土状況	84
PL 3	1 12号甕棺出土状況	85
	2 13号甕棺出土状況	85
	3 木棺墓	85
	4 1号住居跡	85
	5 3号住居跡と5号甕棺	85
	6 1号土坑	85
	7 2号土坑	85
PL 4	1 3号土坑	86
	2 1号溝	86
	3 1号溝・2号溝合流点	86
	4 2号溝上面	86
	5 大道小学校に保管されていた方格規矩鏡	86

PL 4	6 3号甕棺	86
	7 3号甕棺出土遺物	86
PL 5	1 4号甕棺（上甕）	87
	2 4号甕棺（下甕）	87
	3 5号甕棺	87
	4 6号甕棺	87
	5 7号甕棺	87
	6 10号甕棺（上甕）	87
	7 10号甕棺（下甕）	87
	8 11号甕棺（上甕）	87
PL 6	1 11号甕棺（下甕）	88
	2 11号甕棺出土貝輪	88
	3 11号甕棺出土歯	88
	4 13号甕棺（上甕）	88
	5 13号甕棺（下甕）	88
	6 細石核	88
	7 細石核	88
	8 青銅鏡片	88
PL 7	1 1号溝出土遺物	89
	2 1号溝出土遺物	89
	3 2号溝出土遺物	89
	4 2号溝出土遺物	89
	5 2号溝出土遺物	89
	6 2号溝出土遺物	89
	7 3号住居跡出土遺物	89
	8 1号土坑出土遺物	89
	9 1号土坑出土遺物	89
	10 2号土坑出土遺物	89
	11 遺構に伴わない遺物	89
	12 遺構に伴わない遺物	89
PL 8	遺構に伴わない遺物	90

プール改築工事に伴う調査（平成10年度）

PL 9	1	平成10年度プール調査区全景	01
	2	調査区南側	01
	3	調査区北側	01
	4	土器溜め全景	01
	5	家形土器 扉出土状況	01
	6	家形土器出土状況（東から）	01
	7	家形土器出土状況（上から）	01
PL 10	1	1号土坑出土状況	02
	2	2号土坑遺物出土状況	02
	3	3号土坑遺物出土状況	02
	4	4号土坑出土状況	02
	5	溝状遺構（南より）	02
	6	溝状遺構（西より）	02

PL 10	7	溝状遺構（北より）	02
	8	青銅鏡片出土状況	02
PL 11		土器溜め上層出土遺物（家形土器周辺）	03
PL 12		土器溜め下層出土遺物（家形土器）	04
PL 13		土器溜め下層出土遺物（家形土器周辺）	05
PL 14	1～4	土器溜め下層出土遺物	06
	5	1号土坑出土遺物	06
	6	1号土坑出土遺物	06
	7	2号土坑出土遺物	06
	8	2号土坑出土遺物	06
PL 15	1	2号土坑出土遺物	07
	2	4号土坑出土遺物	07
	3～8	遺構に伴わない遺物	07
PL 16		遺構に伴わない遺物	08

I はじめに

大道小学校の施設改築に際しては平成4年の体育館改築工事と平成10年のプール改築工事で埋蔵文化財調査を行った。当時は開発優先でその尖兵としての発掘調査に追われ整理作業ができなかった事と、整理作業の予算化ができていなかったことから整理作業がまったく進まず、報告書作成の準備すらできなかった。

文化財保護行政を遂行していくなかで調査報告書の刊行は遺跡調査の前提条件であり、予算のない状態で細々と作業を進めてきたものである。今年度市の英断でこれまでの積み残しの部分の解消を図ることを目的として予算確保を行った。その結果これが第1集と言えるものである。

II 過去の調査成果

大道小学校からは昭和39年8月に石人石馬研究会の調査の際校長室から船載の方格規矩鏡（PL4-5）が発見された。¹ 当時としては明確な出土地点の確認には至っていないが、甕棺の集中的な出土例から考えても大道小学校敷地内から出土した可能性が高いと推察している。特に今回解体したプールを昭和36年に建設した際に出土した可能性もあることから、残りの鏡片の出土を期待するところである。また、昭和44年の体育館建設（平成4年度建替）に際しても甕棺群と共に袋状口縁丹塗長頸甕などが出土している。² 昭和56年の校舎改築工事の調査では弥生時代の竪穴住居や石棺、中世城関連の溝を確認した。³

このような成果が見られるが、これまでの学校関連の建築物やそれ以前の構造物の建設などで弥生時代の遺構がどこまで残っているかを確認することも重要な課題である。というのも、方保田東原遺跡全体を眺めてみたとき、現在の大道小学校の区域は弥生時代後期前半から存在しており墓域としての利用が最初である。地形的に展望の利く地であることから、遺跡構築の

過程を考えるとときにも重要な地域である。さらに船載鏡の出土からも当時としては神聖な区域の可能性を示している。

III 大道小学校建設及び改修の記録（第3図～第6図）

大道小学校の開校から今日までの間、大道小学校百年史に記載された主な建設及び改修についてみると、以下のような状況である。⁴

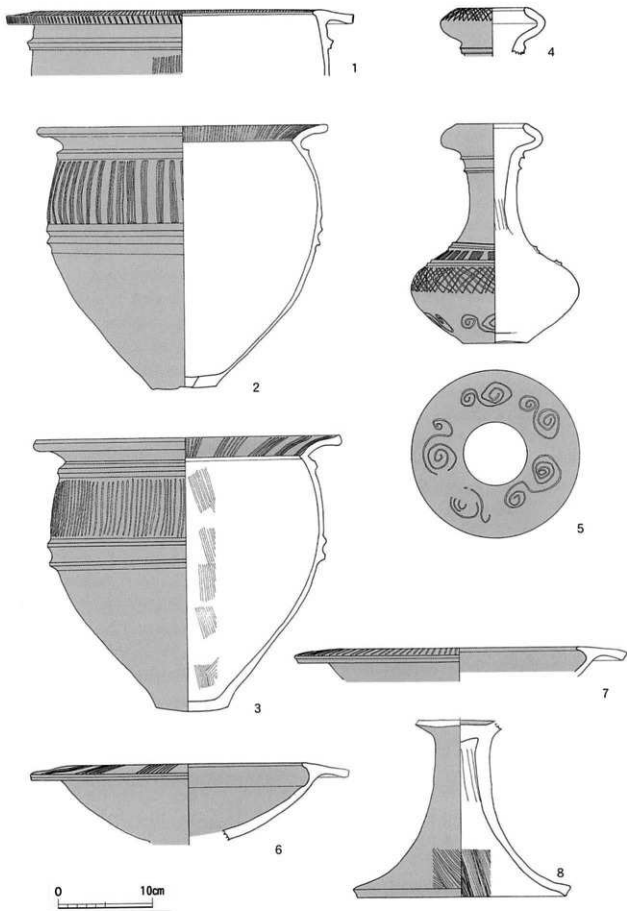
- 明治33年（1900）方保田城跡に大道尋常小学校設立
校舎一棟
- 明治35年（1902）校舎を南側に一棟新築（65坪）
- 明治42年（1909）南校舎に8坪増築
- 明治43年（1910）運動場拡張（1反半余）
- 明治44年（1911）校舎の増築110坪4教室（長さ11間、幅5間、二階建て）
- 明治45年（1912）高等科併設
- 大正5年（1916）農舎1棟建設
- 大正6年（1917）二階建て60坪、2教室増築
- 大正14年（1925）校地開墾
- 大正15年（1926）平屋一棟（150坪）宿直室ほか（15坪）二階建て（130坪）雨天体操場（75坪）新築
- 昭和11年（1936）校地拡張 竹林5畝、運動場1反5畝整備
- 昭和16年（1941）国民学校令により高等科廃止。大道国民学校と改称
- 昭和22年（1947）学制改革により大道小学校と改称大道中学校併設。
- 昭和26年（1951）水道施設落成
- 昭和27年（1952）足洗い場、洗面所増設
- 昭和29年（1954）市町村合併により山鹿市立大道小学校と改称
- 昭和32年（1957）校舎二階建一棟（334坪）改築、給食室（24.5坪）新築。防火用水完成
- 昭和36年（1961）学校プール完成
- 昭和41年（1966）新校舎本館新築
- 昭和43年（1968）講堂解体、体育館倉庫建設

註1 幸平和『西日本新聞に見る鹿本菊池の文化財誌』
山鹿文化財を守る会 1996.10

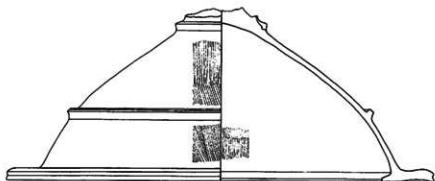
註2 隈 昭志「熊本県山鹿大道小学校出土の弥生式土器」『考古学雑誌』69-1 1983

註3 『方保田東原遺跡』(2) 山鹿市教育委員会 1984

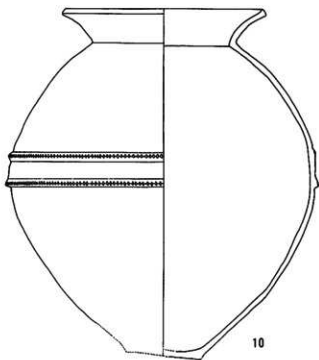
註4 創立百周年記念誌『山鹿市立大道小学校』平成13年



第1図 体育館建設時出土遺物実測図（昭和44年）①



9



10

0 10cm

第2図 体育館建設時出土遺物実測図（昭和44年）②

昭和44年（1969）体育館完成

昭和57年（1982）校舎改築

平成4年（1992）体育館改築

平成10年（1998）プール改築

このように見て来ると、度重なる開発が行われてきており、鏡が出土した場所を特定することは困難である。かつて小学校にはたくさんの土器が集められており、弥生時代から古墳時代にかけての遺物が主体を占めていたが、どこから出土したかについては記載されていない。当時の関係者が興味を持ってこれらの遺物を集められたであろうが、資料としての価値は少なくなっている。少なくとも学校内からの出土か否かだけでも明確にしたいものである。方格矩鏡の出土につ

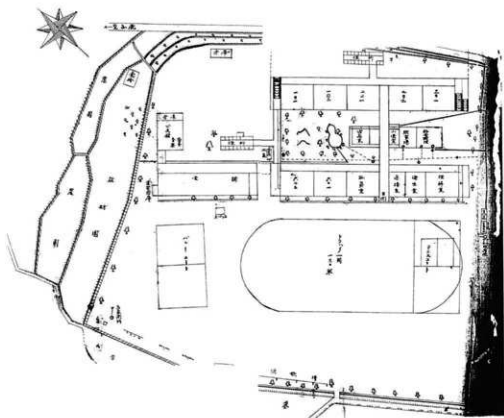
いては鏡が割れていることから、今後の調査によって残りの破片が発見されることで特定できる可能性を秘めている。

IV 大道小学校に残された記録

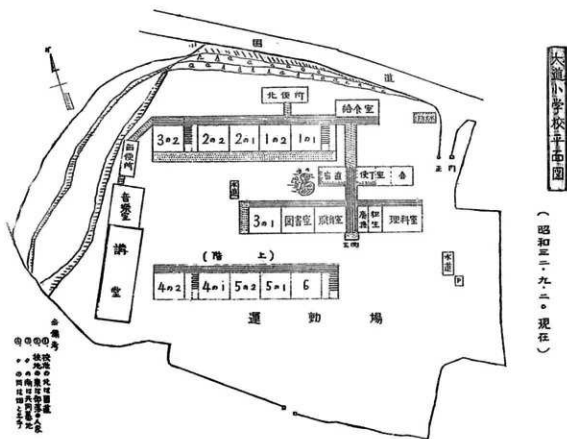
大道小学校に保存されている大正年間に書かれた記録から、旧大道村の古墳について知ることができる。表紙に「郷土史」と書かれたこの記録には、多くの資料と共に古墳に関する資料が綴じてあり、次のような記載が見られる。

大道村に於ける古墳の数

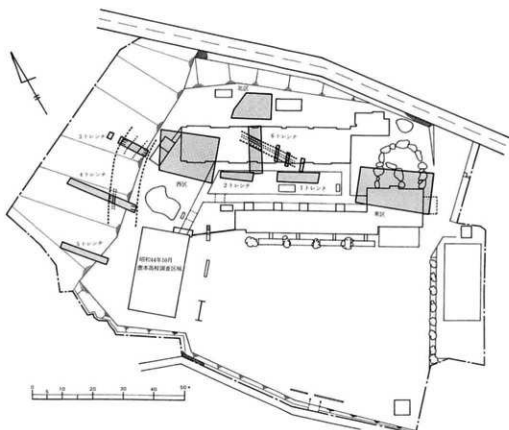
- A 完全なるもの……10
- B 半壊せるもの……4



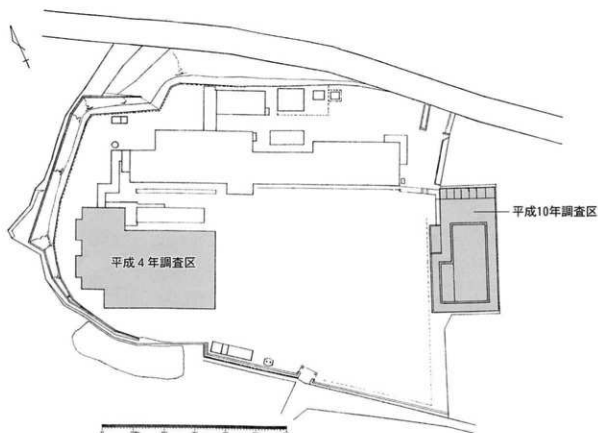
第3図 校舎配置図（昭和20年代）



第4図 校舎配置図（昭和32年）



第5図 校舎配置図（昭和56年）



第6図 校舎配置図（平成10年）

- C 全壊して現在認むべきものもなく往時ありしこと明らかなるもの……4
D 横穴……0

計 18

古墳の種類

- A 円形古墳……10
B 瓢形古墳……4

備考 他に多くの古墳を有せしが明治35～6年頃に至り水揚げ工事の時多くの塚を破壊して石棺を掘り出したるため現今其存在を認めず。

大道村に於ける古墳の呼称

一 大道村大字方保田なる本村小学校の西南に位して、該地の墓所あり其の上部に瓢形古墳あり是を称して経塚となす。往時この古墳に立ちて法師の経典をあげし所なりという。是れ其の名をなせる所以なり。

二 大道村の西端なる中区地方の高台に古墳あり瓢形なるを以て、双子塚と称す。其の伝に曰く「世に石村（八幡村）の霊塚の五郎左衛門と丘の左衛門及び当双子塚なる、おさんどんの三狐あり何れも中々靈驗著しくよく人の望みを達してくれる」と、中にも双子塚のおさんどんは今尚参詣者絶えず。

朱塗りの烏居林立し香煙あたりをおほえり。

三 波静かに水清き事水が瀬となり淵となり遂に夕毎入相えぐる潜龍寺のほとりを経て、世にも名高き潜龍淵の深淵に望む。

其河畔数丈の絶壁の上に位するを以て端山と称する古墳あり。其伝に曰く「古来端山六郎左衛門と称する白狐君の住家とて、極めて靈驗著しとぞ往時は数多くの参詣者あり由。然して折願者皆希望を達したり」と称せらる。さりながら星霜移り菊池川の水蝕するところとなり事や半壊に及べり。

四 大道村避病院の西方立石と称せらるる所に小塚あり。往時其の小塚を発掘せしに石棺中より剣を発見し、持ち帰れば夜に入り瓦礫を投げ眠る能はず故に震驚し大道村大字方保田字日置竹下三平宅の山に埋め今尚神として祭れり由。

各区に於ける古墳

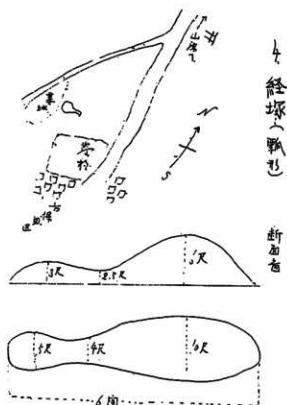
一 方保田地方に於ける古墳（日置馬見塚をも含む）

1 中島 2 亀塚 3 清水山 4 端山 5 経塚 6 馬見塚
イ三ヶ塚 ロ、ハ、二各名称なし

この中で書かれている古墳を紹介すると次の通りである。

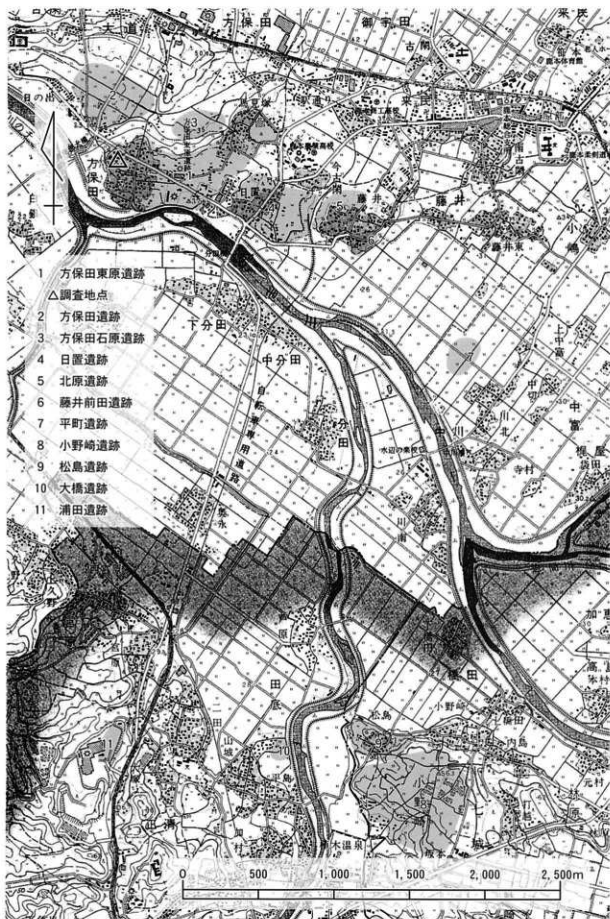
中村	双子塚
古閑村	円墳（木下古墳）
方保田村	亀塚、端山古墳、清水山、中島、宮の裏、立石、経塚、馬見塚山4基（三ヶ塚ほか）
藤井村	前方後円墳

この記録には古墳の配置図も見られるが、現在の大道小学校には経塚古墳（前方後円墳）が存在しているとの記録内容である。¹³（第7図）



第7図 経塚古墳見取図

註5 「郷土史」大道小学校



第8図 弥生時代遺跡分布図

V 遺跡の立地・地形

熊本県山鹿市は平成17年1月15日市町村合併により、山鹿市、鹿北町、菊鹿町、鹿本町、鹿央町が新山鹿市となった。

山鹿市は県北部に位置し、北は福岡県立花町と大分県日田市（旧上津江・中津江村）、東は菊池市、西は和水町（旧菊水・三加和町）、南は植木町と接し、面積299.67km²、人口約57,000人の田園都市である。

旧山鹿市は「温泉と古墳の町」として知られている。とくに温泉の歴史は古く和名類聚抄には肥後国山鹿郡に温泉の記載が見られ、すでに平安時代前期の段階に温泉が湧出していた事が理解できる。⁴⁶

阿蘇外輪山の麓に位置する菊池溪谷に源を発する菊池川は全長62.1kmで西に向かって流れ菊池市・山鹿市・和水町・玉名市等を流れ有明海に注いでいる。川の流域には大小65の支流を有し肥沃な氾濫原を形成している。特に山鹿市は菊池川の中流域にあたり下流域との間には和水町との間の丘陵地帯が存在することから、氾濫が繰り返され菊池市まで肥沃な平野が構築されている。その中には条里の跡も残されていることから、古くから重要な穀倉地帯として理解されていたことが窺える。

大道小学校は旧山鹿市の東方に位置し、菊池川の流れて沿って形成された標高35mの河岸段丘上に立地している。この段丘上には方保田と馬見塚の集落が形成され、東西1km南北4～500mの舌状台地を呈している。台地南側に菊池川が流れ北側には方保田川が流れ西側の大道小学校下で合流している。

これらの河川と台地には約15～17mの比高差があり、防衛に適した地形となっている。

大道小学校は台地の先端に位置し菊池川を行き交う船や人物を監視するには最適な位置に存在している。そのため方保田東原遺跡の中でも古い段階から墓域として、中期後半から後期にかけての甕棺が出土している。しかし、甕棺に伴う住居地域は未だに明らかにできておらず今後の課題である。

註6 池邊 彌『和名類聚抄郡郷里驛名考証』吉川弘文館 昭和56年

VI 体育館改築工事に伴う調査（平成4年度）

1 調査の経過

1 調査に至る経過

平成3年秋に大道小学校体育館改築が計画され、予算折衝の中で学務課との話し合いをしてきた。この体育館は昭和44年に建設されているが、その際弥生時代中期後半から後期前半にかけての甕棺や丹塗り土器が発見されていることもあって、調査の必要性を強く訴えてきた。

平成4年度事業として体育館改築工事が決定したことから調査期間と工事期間の調整を行い、調査は夏休み中には終了し、その後本格的な建設工事に入ることとなった。調査は新たに作られる体育館の範囲の中で、現在の体育館以外の部分を解体前に実施し、解体後体育館下を行う2段階の調査とした。

そのため、学校側の対応として、工事期間中体育館はもとより運動場も半分以上は工事車両の進入などで使われなくなり、この年に限って5月に運動会を開催することになった。

調査はこれまで博物館で文化財行政まで行っていたので、博物館と文化財行政の切り離しを図ることを目的とし、平成4年に文化課が新たに設置された。これにより専門調査員が1名増加したが、調査担当職員は博物館との兼務であり、調査員にとってはなんら進展のない状況で新たな負担増の結果となってしまう、文化課を設置したことは形骸化してしまっただけである。

2 調査の目的

大道小学校では過去に弥生式土器、須恵器、土師器などの多くの遺物が保管されていた。現在これらは全て市立博物館に寄託され、出土文化財管理センターにおいて保管している。この中には完形の須恵器が多く含まれていることから、学校敷地内での出土の可能性が高い。さらに小学校に保存されている大正年間に書かれた「舞土史」には小学校南側に経塚古墳（前方後円墳）が存在していることが窺える。

昭和44年の体育館建設に際して出土した甕棺や、丹塗り土器の存在、さらに昭和56年の校舎改築工事において出土した住居跡、石棺群、中世城関連の溝が存在していたことから、今回の調査では大きく次の点に注

目して調査を行うこととした。

- 1 弥生時代中期後半から後期前半の甕棺群の確認
- 2 弥生時代中期後半から後期前半の集落の確認
- 3 経塚古墳の位置の確認
- 4 箱式石棺の有無の確認
- 5 中世方保田城の遺構の確認

3 調査の組織

調査主体	山鹿市教育委員会
調査総括	北井 澄生（山鹿市教育長兼山鹿市立博物館長）
総括事務	瀬口 嗣生（学務課長） 加藤光一郎（学務課主幹） 福永 浩（学務課参事）
工事事務	柿山 繁樹（建設課主事）
事務担当	永田 征夫（文化課長） 木村 理郎（文化振興係長） 渡辺 義明（文化振興係主事）
調査事務	次木万里子（博物館主任主事） 大森 勲（博物館主任主事） 山下 透（博物館技師補） 永田 臣司（博物館主事補）
調査担当	中村幸史郎（文化課文化財係長兼博物館副館長） 高宮 京子（文化課主事補兼博物館学芸員）
調査指導	賀川 光夫（別府大学教授） 白木原和美（熊本大学教授） 田中 哲雄（文化庁記念物課主任調査官） 隈 昭志（熊本県文化課審議員）
発掘作業員	飯田民子、飯田ツヤ子、飯田光子、江崎隆司、奥村千鶴子、北原美和子、瀬口賢一、高橋信子、高橋道昭、竹熊義人、高木和子、中原未美、中原雄一郎、野田辰起、福山須美子、福山陽子、福山千代美、本田武子、前川誠一、松野千尋、松野正義、松本定、松山カチ子、吉井新助、若杉美也子
整理作業員	前田軍治、小原実寒、大森よう子、城

葉子、森みつよ、山口美智子、野満彩子

調査協力 山鹿市立大道小学校、熊本県文化課、松本健郎（熊本県文化課）、大栄設計株式会社（地中探査）、出雲建設、前原設計事務所、最上敏（装飾古墳館学芸員）、池田朋生（装飾古墳館学芸員）、椎葉博昭、山田大輔、水上浩司、北野隆（熊本大学名誉教授）、小嶋立州（歯科医師）

4 調査の経過

平成4年（1992）

5月21日（木）晴れ

午後1時博物館に作業員集合。器材準備の後現場へ向かう。体育館横の体育倉庫の古いプレハブを資材小屋として使用することを学校側と交渉し了解を得たので、小屋の中の整理と資材の運搬を実施した。体育館西側から調査対象とすることとした。

5月22日（金）晴れ

朝から調査区の設定をおこなう。体育館の壁に沿って東西10m南北19mの範囲で渡り廊下の部分を北東部で東西3m、南北6mをへこませる形に設定した。午前中大栄設計による地中レーダー探査調査を実施していただく。体育館を挟んで東西2箇所を実施。数箇所では反応が確認された。午後は重機による表土剥ぎを開始した。表土は固く締まっており作業が困難である。

5月25日（月）晴れ

引き続き重機による表土剥ぎを実施したが埋め立てのため瓦礫が多く出ており、土自体が固いので作業が思うように進めない。作業員には清掃作業をお願いする。体育館に沿って礎石が検出された。

5月27日（水）晴れ

礎石の中からレンガの破片が出土したことから、明治以降のものであると判断し図化せずに除去した。

6月1日（月）晴れ

昨日小学校の運動会が終了したので学校長や学務課との協議の結果体育館東側も並行して調査することになった。調査範囲は体育館に沿って1mの間隔をとり、東西10m、南北32mとした。この中には遊具が設置さ

れており、作業員の手で解体撤去することとした。さらに記念樹も植栽されており、これを残しつつ表土剥ぎを行うこととした。

6月3日(水) 晴れ

東西の調査区に10mごとの杭打ちを行う。西から東に向かって1～6、南から北に向かってA～Fとした。これで東西調査区の位置関係が明瞭になった。

6月8日(月) くもり

西調査区では遺構検出作業を行い、東調査区は業者の手で重機による表土剥ぎを実施する。さすがに早い仕事ぶりである。

6月10日(水) 晴れ

中世の遺構と考えていた東調査区のビット群の埋土からレンガ、セメント、定規の破片などが出土したため掘り下げのを中止した。

6月11日(木) 晴れ

東調査区から甕棺が検出され、3号甕棺の中から磨製石鏃3点が出土した。矢を受けて死亡した人の墓であろう。

6月15日(月) くもり

東調査区で確認されていた溝の底が見えかかってきた。深さ3m近くまで掘られている。3号甕棺から4点目の磨製石鏃が出土する。磨製石鏃はこれまで方保田東原遺跡からは出土したことがなく意義深いものとなった。

6月18日(木) 晴れ

西調査区は住居跡実測終了。東調査区の1号溝は南北に伸びており地表下3.1mでようやく底が見られ、逆台形の断面である。2号溝は東西に伸びておりV字型の断面である。3号甕棺からさらに2点の磨製石鏃が出土した。

6月22日(月) 雨

1号溝と2号溝の交差点を掘り下げたが、久々の雨で作業は午前中で打ち切った。

6月24日(水) 晴れ

雨のため調査区内に記念樹が倒れこみテントを潰していた。さらに2号溝の南側の土手もが崩落していた。このため原状回復のための作業に集中した。

6月27日(土) 雨

雨の中テントをかけて甕棺の実測作業を行う。県か

らの実測応援部隊も2名来た。午後博物館の考古学講座受講生の見学会を実施。

7月2日(木) くもり

遺構検出は2号溝北側の区域と1、2号溝交差点での作業のみとなった。1号溝と2号溝の関係は埋土の状況から2号溝が先行し、その後1号溝を掘っているようである。

7月6日(月) くもり

本日学務課、建設課、解体業者、調査担当で打ち合わせを行い、体育館解体作業を7月8日～22日までの間、その後8月15日までに調査を終了することとなった。

7月7日(火) 晴れ

今日で体育館の東西部分の調査は終了した。明日以降業者により解体作業を実施することとなっている。

7月8日～20日の間

体育館解体作業のため発掘調査一時中止

7月27日(月) 晴れ

久々の現場である。業者により表土をあらかじめ除去していたので作業員に平坦にしてもらった。体育館の下にあったためかなり破壊されており遺構の残り具合はよくないようである。

7月29日(水) 晴れ

調査区全体がようやく平坦になりつつあり、しかし日照りが強く散水作業を行いつつ削平を行っている。東調査区で検出された2号溝に続くような溝が確認された。10mほど西に進んで北へ直角に曲がって約20m進んでいる。

8月2日(日) 晴れ

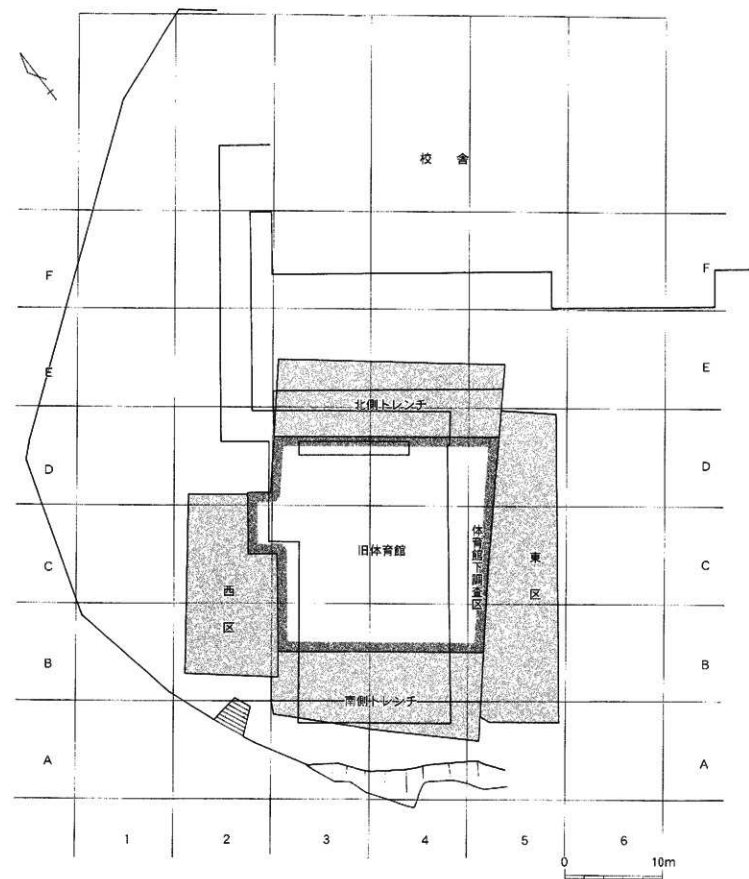
博物館主催の一日発掘調査隊を実施し県内外から40名の参加。装飾古墳館の最上芸員が応援に駆けつけてくれた。

8月7日(金) くもり一時雨

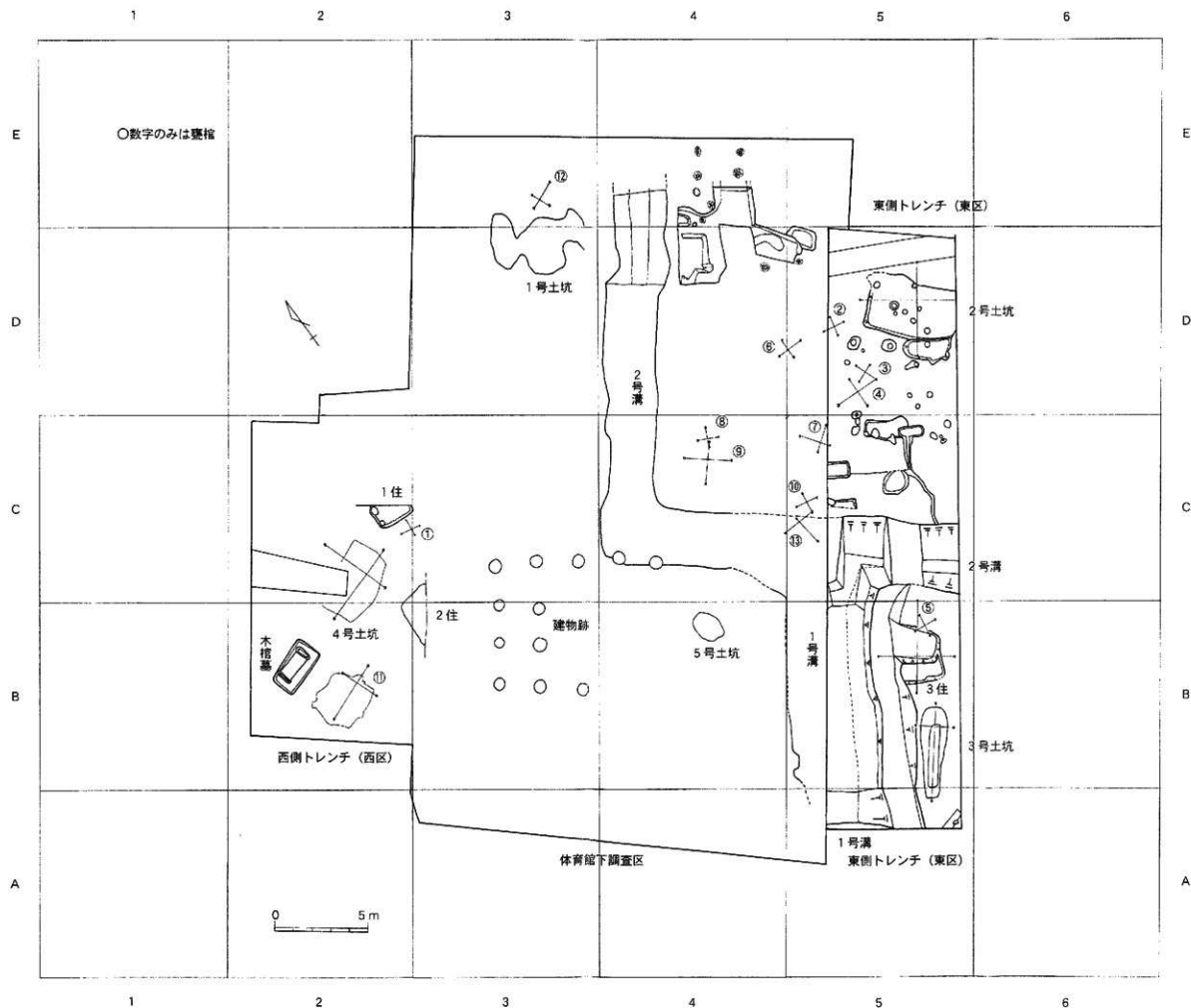
台風が沖縄から奄美経由で鹿児島方面に接近中のため、現場では台風対策でテントなどを撤収した。体育館下の地中レーダー探索実施。

8月12日(水) くもりのち雨

午後から雨のため作業員の皆さんは午前で帰し、午後からはテントを張って甕棺の実測を行う。実測応援団で県の現場(蒲生上の原遺跡)から4名来てもらった。しかし横なぐりの雨のため3時前に解散。



第9図 平成4年度調査区配置図



第10図 遺構配置図

8月18日(火) くもり

台風接近のため時おり涼しい風が吹き作業はしやすかった。果から4名の実測の応援団来る。

8月20日(木) 晴れ

午後から方保田東原遺跡整備策定委員会開催。文化庁記念物課田中哲雄主任調査官、別府大学賀川光夫教授、熊本県文化課隈昭志審議員を迎えておこなう。その後現場視察。

8月22日(土) 晴れ

夜8時過ぎようやく全ての調査が完了した。調査員不足と遺構密度の高さから時間をとられてしまった。博物館と文化課の兼務での調査には限界があり、調査に集中できない結果となっている。

5 調査区の設定

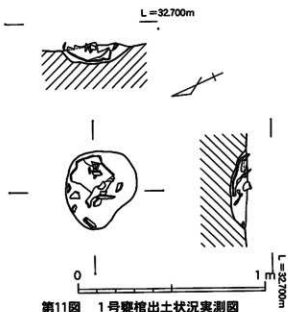
調査は当初体育館を挟んで西側と東側に分かれて調査区を設定した。その後、体育館下についても解体した後調査を行うところから中央区とした。それぞれの調査区的位置を明確にするため体育館の北壁を基準に10m柵を切って西から東に1～6区、南から北へA～E区とした。(第9図)

2 調査の成果

1 壙棺の調査

(1) 1号壙棺(第11図)

体育館西側のC-2区とC-3区の間に水平な位置

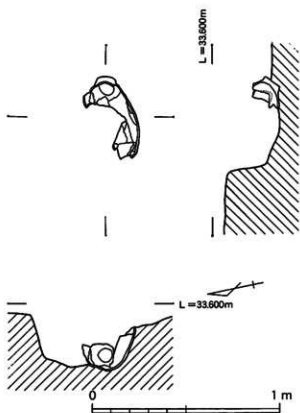


第11図 1号壙棺出土状況実測図

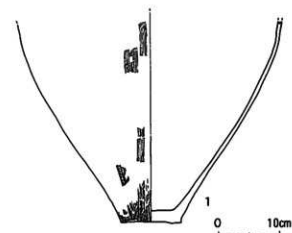
に埋葬されている単棺である。すでに上は削平されており僅かに破片を残す程度であった。

(2) 2号壙棺(第12・13図)

体育館東側のD-5区に埋葬されていた。すでに上を削平されており僅かに底部と胴部の一部を残している。現状では主軸をほぼ南西に向け、水平から35°の傾きで埋葬された単棺である。



第12図 2号壙棺出土状況実測図

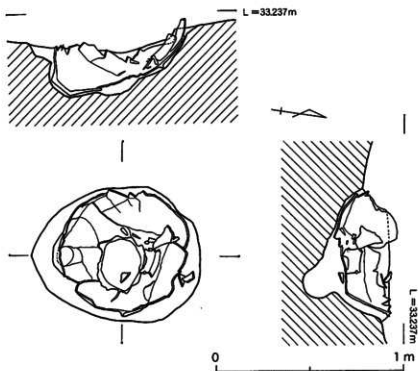


第13図 2号壙棺実測図

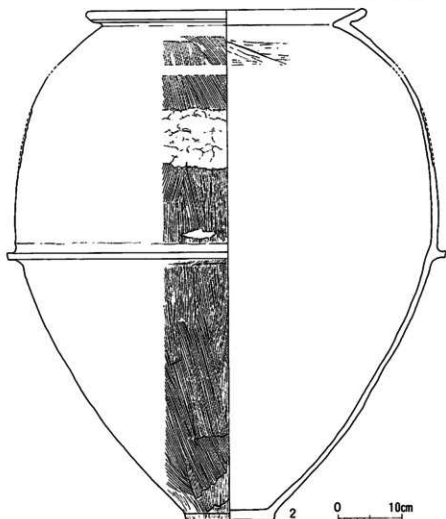
1 胴部の器壁は薄く、きめ細かな刷毛目仕上げを行っている。底部は平底で安定した造りである。表面には煤の付着が見られ、煮沸用の甕を転用したものである。

(3) 3号壺棺(第14・15・16図)

体育館東側のD-5区から4号甕棺と隣接して埋葬された単棺である。主軸を北から西に19°向け、水平から49°傾いている。内部から磨製石鏃8点が出土した(第16図3~10)。これまで方保田東原遺跡からは磨製石鏃の出土は見られなかったことから、単



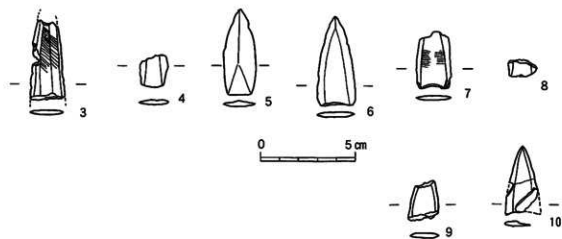
第14図 3号壺棺出土状況実測図



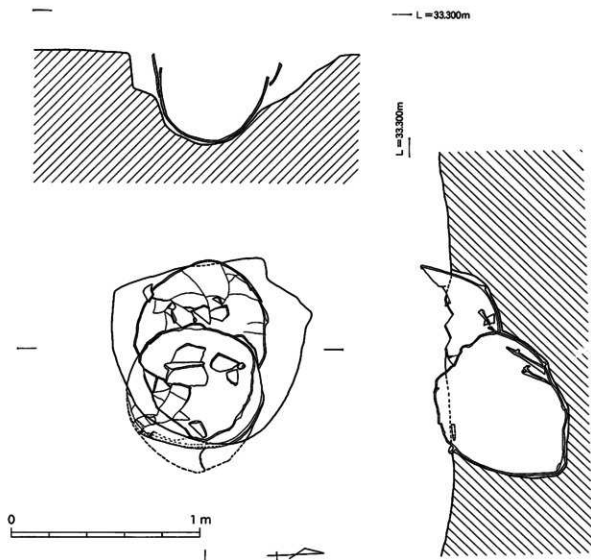
第15図 3号壺棺実測図

なる副葬品ではなくほかの集団との戦闘で矢を受けたものと判断した。甕棺は上部を削平され口縁部も一部転落していたものが残っている程度で、加えて後世柱穴状の掘り込みがなされていた。

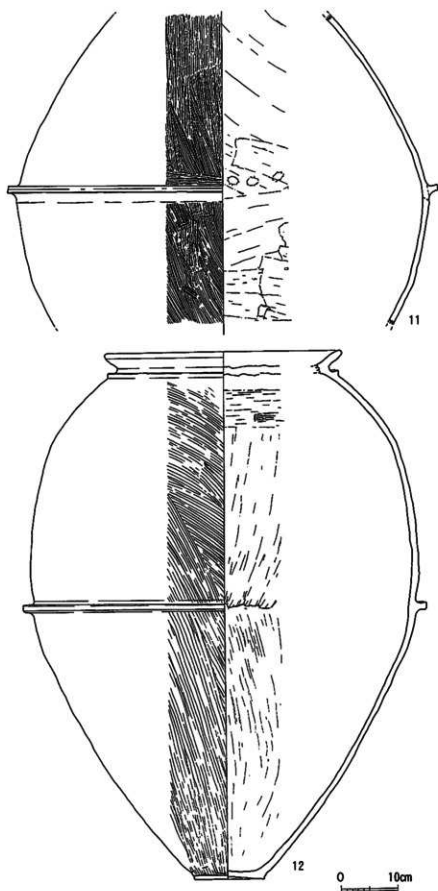
口縁部は胴部との接点が見られなかったが、同一個体と判断し図面上で復元を行った。口縁部は短く水平に広がりが胴部が大きく張り出ているため、口縁部内側が鋭角になっている。胴部中位には1条の凸帯を巡らしており底部は平底である。器面は外面を刷毛目調整で、内面はなで調整である。焼成は良く硬く焼き締まっている。



第16图 3号墓出土文物实测图



第17图 4号墓出土状况实测图



第18图 4号墓棺冥测图（上·下）

(4) 4号壺棺 (第17・18・19図)

3号の壺棺に隣接して埋葬された合わせ口壺棺である。主軸はほぼ東西に向け、水平から45°の角度で傾き、土坑に挿入している。上甕は僅かに残り下甕は口縁部を欠いた状態に削平されていた。埋土の中に縄文土器が含まれていたが、後ほどまとめて報告する。
上甕⁽¹¹⁾

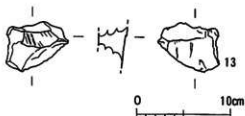
下甕を覆うため口縁部を意図的に欠損しており、胴部の多くと底部は二次的な削平で欠損している。胴部には1条の凸帯を巡らし底部は平底になるであろう。形状は6号壺棺に類似している。器面は外面を刷毛目、内面はなで仕上げで焼成は良好で硬く焼き締まっている。

下甕⁽¹²⁾

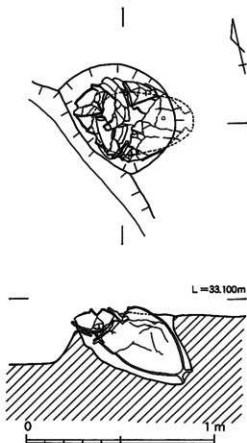
口縁部は反り気味に開き、内側は擠み出しているが埋葬のため意図的に打ち欠いていた。口縁部直下には凸帯を巡らし、胴部は大きく張り出している。胴部中位には凸帯を巡らし、底部は平底である。表面は粗い

刷毛目で、内面はなで調整である。焼成は良好で硬く焼き締まっている。

13は壺棺埋土に混入していたものであるが埴輪の破片である。小さくて断定は出来ないが直線的であるところから形象埴輪の可能性も残っている。前述のIV「大道小学校に残された記録」とおり経塚古墳が体育館南側にあたることから、この古墳に伴う埴輪の可能性を示している。



第19図 4号壺棺出土遺物実測図



第20図 5号壺棺出土状況実測図

(5) 5号壺棺 (第20・21・22図)

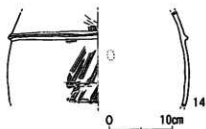
合わせ口壺棺で体育館東側のB-5区で3号住居から切られていた。加えて甕の上部を削平されているため、上甕は口縁部を部分的に残す程度であった。主軸は東西方向から北へ10°向いており水平から40°の角度で土坑に挿入する形で埋葬していた。なお、埋土中から歯が12本程度出土した。歯冠部分のみで、割れているため全体的に小さな印象を受けるが、門歯が大きいところから永久歯と判断した。

上甕⁽¹⁴⁾

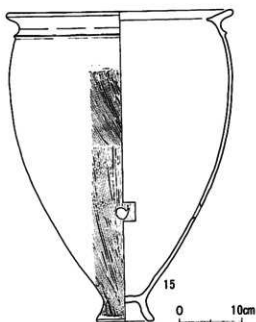
胴部の一部しか残っていないが小型の甕で胴部には1条の凸帯を巡らしている。焼成は良く硬く焼き締まっている。器面は外面を刷毛目調整で、内面はなで仕上げをしており工人の指の圧痕が残されている。

下甕⁽¹⁵⁾

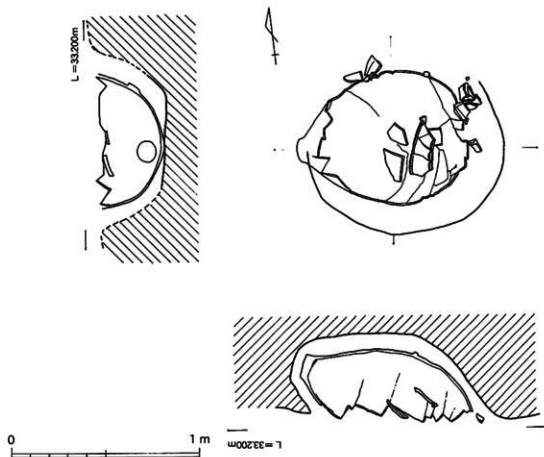
小型の甕で口縁部は小さく開き、内側を摘み出している。直下には小さな凸帯を巡らしている。胴部の張り小さく、下位に穿孔が見られる。底部は小さな脚台になっている。器面は外側には細かな刷毛目、内面はなで仕上げである。焼成は良く、焼き締まっている。



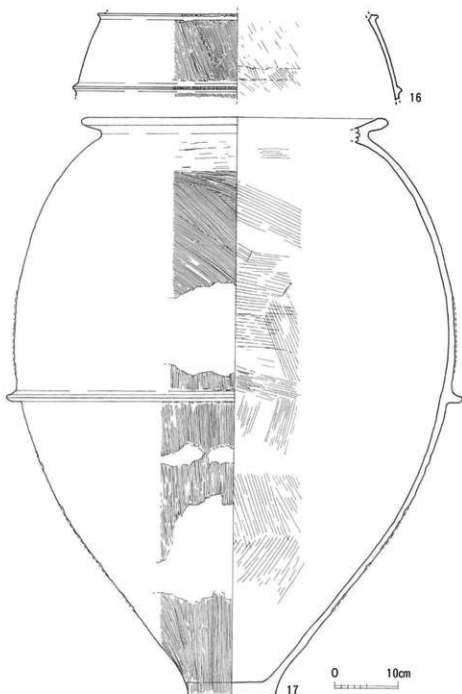
第21図 5号甕棺上甕実測図



第22図 5号甕棺下甕実測図



第23図 6号甕棺出土状況実測図



第24図 6号甕棺実測図（上・下）

[6] 6号甕棺（第23・24図）

体育館東側のD-4、5区間に埋葬された甕棺である。内部から別の甕棺の破片が出土しており合せ口甕棺の可能性がある。主軸はほぼ東西で水平から27°の傾斜角で土坑に挿入している。甕の上部は削平されていた。

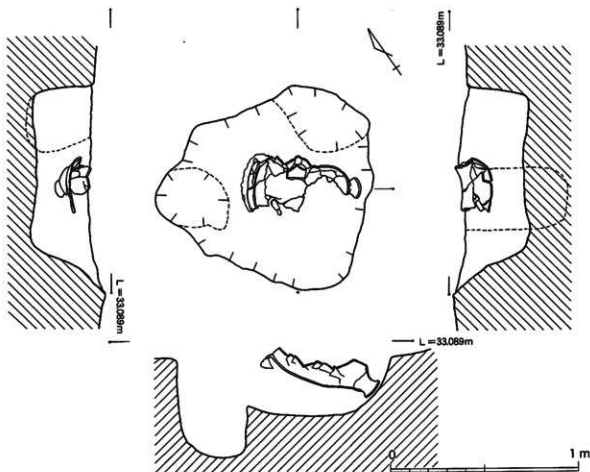
上甕(6)

口縁部は意識的に欠損していると推察できるが、底部は二次的に欠損したものである。胴部の破片で2条

の凸帯には刻み目を施している。器面は刷毛目で調整し焼成は良く、硬く焼き締まって器壁は薄い。

下甕(7)

大型の甕棺である。口縁部は短く広がり内側に大きく摘み出しているが、埋葬のため意識的に打ち欠いている。胴部は大きく張り出し、中位に1条の凸帯を巡らしている。底部は平底である。器面は刷毛目調整で外側にはきめ細かく、内面には粗い刷毛目であった。焼成は良く、硬く締まっている。

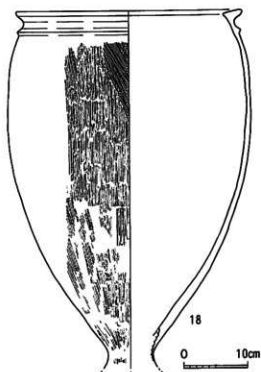


第25図 7号墓出土状況実測図

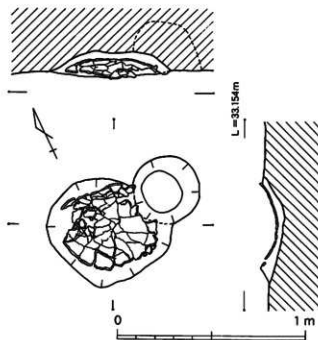
(7) 7号墓 (第25・26図)

体育館東側のC-5区に埋葬された変棺である。主軸は北から西に55°振っており、水平から43°の傾斜で埋葬されている。口縁部の近くには目張りの粘土が残っていた。現状では単棺であるが、粘土の状況も考慮すれば合わせ口変棺の可能性も残っている。しかし上部を削平されているため、にわかに判断できなかった。

小型の変棺(図)で片側を削られている。口縁部は短く水平に開き、直下には小さな凸帯を巡らしている。胴部の張りりは小さく底部は小さな脚台になる。器面の外側では胴部中位に煤の付着が見られる。内面には口縁部から12cmの幅で黒色に変色しており、底部近くでも黒斑が見られる。煮沸に使われていたものを埋葬に転用したものと考えられる。



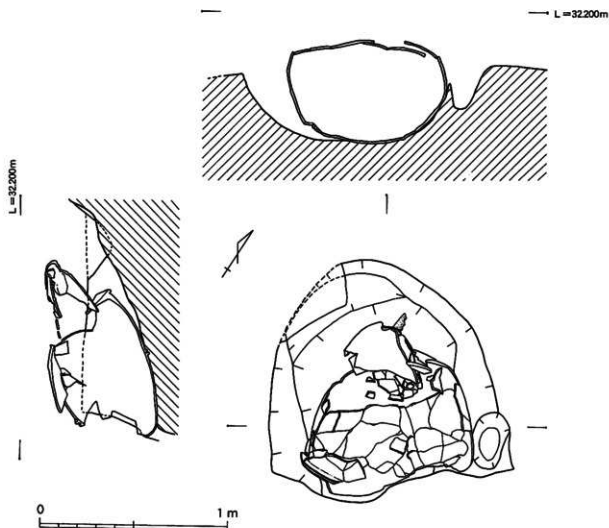
第26図 7号墓実測図



第27図 8号壺棺出土状況実測図

(8) 8号壺棺 (第27図)

体育館下のC-4区に埋葬された壺棺である。一部は柱穴で壊され、加えて上部を削平されていて、壺棺の一部しか残っていなかった。主軸は東から南へ28°振り、ほぼ水平に埋葬していたが上部を削平されている。



第28図 9号壺棺出土状況実測図

(9) 9号壺棺 (第28・29図)

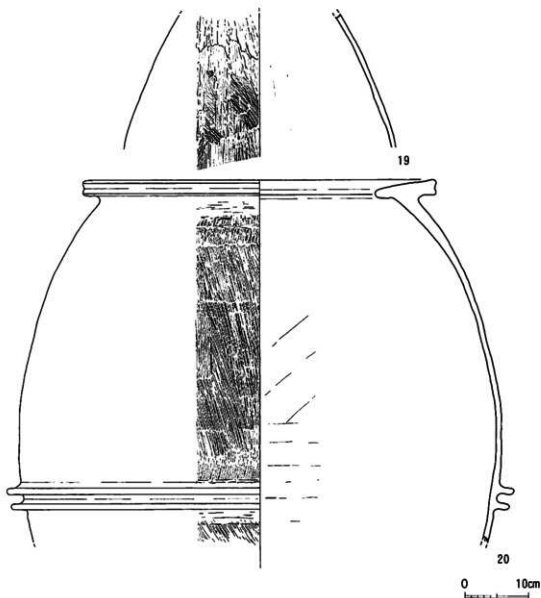
8号壺棺の横に埋葬された壺棺である。壺自体は押しつぶされており、傾きから上壺になるようである。下壺は他の遺構によって底部を切られていたが、時間の都合で遺構の確認はできなかった。埋土の中から丹塗りの土器片2点が出土している。この他には縄文土器片3点も含まれていたが、縄文土器は後でまとめて報告する。主軸はほぼ北西に向け水平から20°の傾きで埋葬している。

上壺(19)

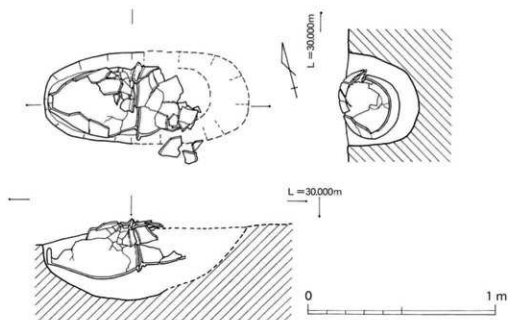
胴部のみで口縁部や底部は残っていなかった。器壁が薄く小型の壺を利用している。器面は刷毛目調整を表面に行い、内面はなで調整で仕上っている。

下壺(20)

大型の壺棺で口縁部の幅が10cmと大きく、水平に広がり丁字形を呈している。胴部は大きく張り中位に2条の凸帯を巡らしている。底部は欠損のため不明である。器面は表面を刷毛目、内面はなで調整である。焼成が悪く柔らかい仕上がりである。



第29図 9号壺棺実測図(上・下)



第30図 10号墓棺出土状況実測図

(10) 10号墓棺 (第30・31図)

体育館東側のC-5区で13号墓棺に隣接して埋葬された合わせ口墓棺である。上甕の底部を欠いているが、ほぼ原位置を保っている。主軸をほぼ東西に向け、傾きも僅かに7°の傾斜であった。大ききから小児用甕である。

上甕(21)

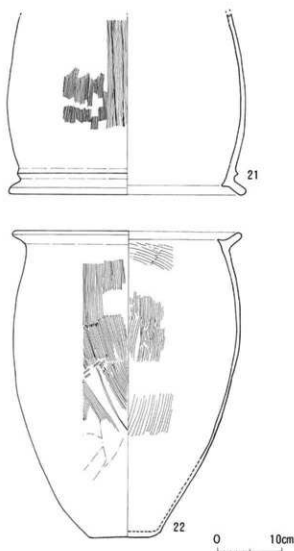
胸部下位から底部を欠損している。口縁部は短いが反り気味に広がり、内側を摘み出している。口縁部直下には1条の凸帯を巡らしている。焼成は良く硬く焼き締まっている。器面は外面に刷毛目調整で、内面はなで仕上げをしている。

下甕(22)

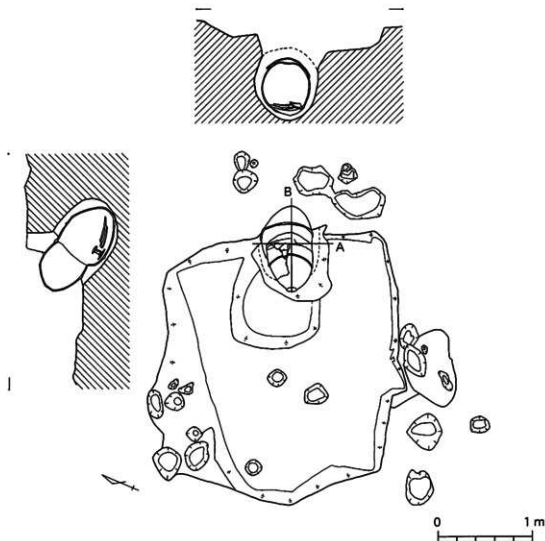
小型の甕で、口縁部は短く反り気味に開いている。胸部の張りも小さく明らかに小児用である。底部は平底になる。器面は外面に細かな刷毛目、内面は粗い刷毛目を施している。

(11) 11号墓棺 (第32・33・34・35図)

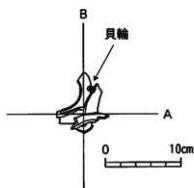
体育館西側のB-2区で木棺墓と並行するように縦2.8m、横2.6mの方形に土坑を掘り込み、そののち北側に墓棺埋葬土坑を掘っていた。主軸は東北東に向け、合わせ口の墓棺はほぼ原形を保っていた。下甕は口縁部を甕の内部に転落した状態であった。内部からは僅かに土が流れ込んでいたが歯が数本出土し、イモガイ製縦型貝輪が2枚重なった状態で出土した(25)。イモ



第31図 10号墓棺実測図(上・下)



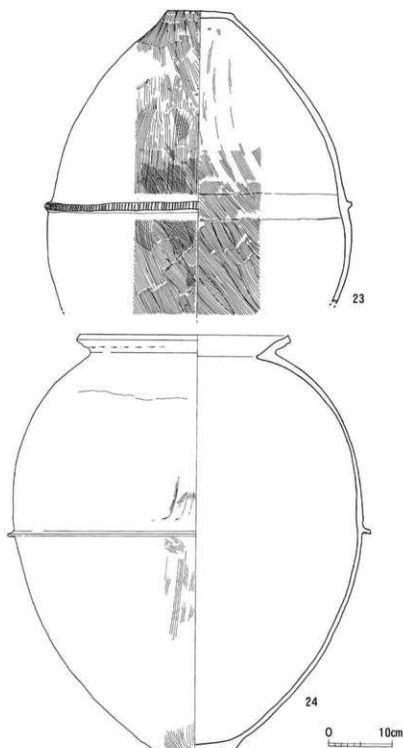
第32図 11号墓棺出土状況実測図



第33図 11号墓棺内貝輪出土状況実測図

ガイの内径は小さく、このことから子供用の甕である
こと、イモガイ製縦型貝輪の使用例が女性に多いこ
とから埋葬者は女性の可能性が高いことを推定できる。
さらに、埋土が赤く染まっており、朱を塗っていたこ
とも明らかになった。主軸は南西と西南西の間を向い
ており水平から 36° の傾斜角で土坑に挿入している。
上壁(4)

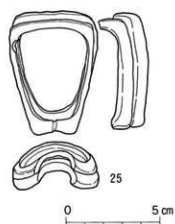
下壁にかぶせるため口縁部を粘土接合面から意識的
に打ち欠いており、胴部には刻み目を持った1条の凸
帯を巡らしている。底部は平底で器面は全面刷毛目調
整で、明瞭に残っている。焼成は良く、硬く締まっ
ている。



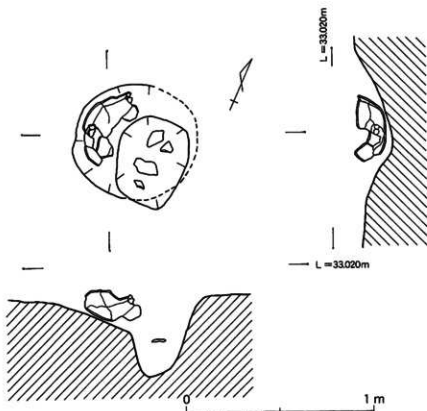
第34図 11号墓棺実測図（上・下）

下壙(24)

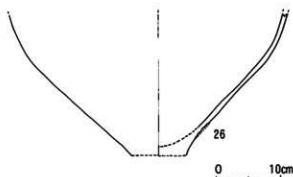
ほぼ完全な形で出土しており口縁部は小さく、外反しつつ広がっている。胴部は大きく張り出し中位に凸帯を1条巡らしている。底部は平底で全体的に上壙と類似している。



第35図 11号墓棺出土遺物（貝輪）実測図



第36図 12号墓出土状況実測図



第37図 12号墓実測図

(12) 12号墓 (第36・37図)

体育館北側のE-3区に埋葬されていたものであるが、柱六などによる二次的な破損が著しく僅かに甕の一部を検出した程度であった。

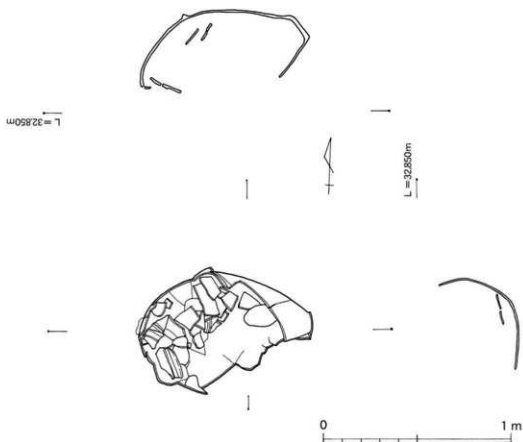
26は底部周辺のみを残している。平底になる可能性が高く胴部は大きく膨らんでいて壺になるであろう。器面調整は全面をなで仕上げを行っている。焼成は良く焼き締まっている。

(13) 13号墓 (第38・39・40図)

体育館東側のC-5区から出土した甕である。この甕が出土した部分は1号溝と2号溝の交差点に当たり位置的には溝の上に位置する状況であった。溝の時期は時間を示す遺物が見られないため明確ではないが、中世城に伴うものと推定していたので、微妙な位置に埋葬されていたことになる。今回の調査では溝については時間的規制と遺構そのものは保存されるところから完掘しなかった。そのため溝の配置については部分的には掘り下げたが、大半は地表面での確認を行ったもので、13号墓の下にも溝が延びていた。写真(P L 3-2)でも判るように溝の端に甕が位置している事が確認できた。従って、甕は二次的に移動されたものと判断することができよう。埋土の中に縄文土器や甕破片が含まれていた。縄文土器は後ほどまとめて報告する。

上甕(7)

上甕といえるのか疑問であるが、内部から出土した甕である。口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部は短く反り気味に開き、内側を積み出している。口縁部直下には1条の凸帯を巡らしている。器面は外



第38図 13号墓棺出土状況実測図



第39図 13号墓棺上壁実測図

面には粗い刷毛目、内面は細かな刷毛目調整を行っている。焼成は甘くもろい感じである。

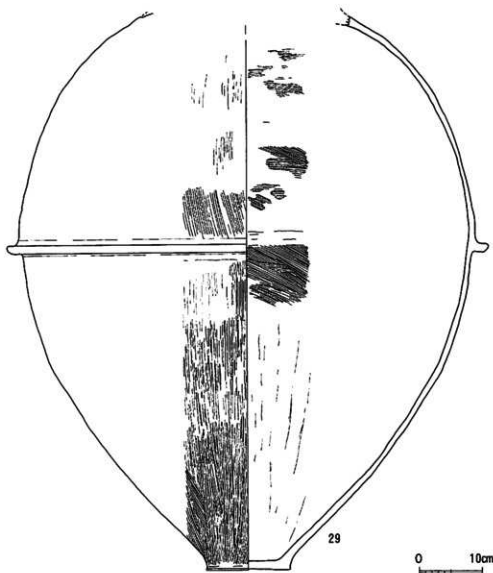
口縁部は小さく水平に開き、4cm下に小さな凸帯を配している。器面は外面に刷毛目、内面はなで仕上げである。

埋土中より出土した甕(26)

口縁部の破片で3cm下に凸帯を巡らしている。小児用の甕棺の破片である。

下甕(29)

大型の甕棺であるが口径が小さいため埋葬時口縁部を意図的に欠損している。胴部は大きく張り出し最大径の部分に1条の凸帯を巡らし、底部は平底である。器面は刷毛目調整で、表面は粗い刷毛目に対し内面は細かな刷毛目である。焼成はあまりよくなく甘い焼き具合である。



第40図 13号壟下壘実測図

2 木棺墓の調査

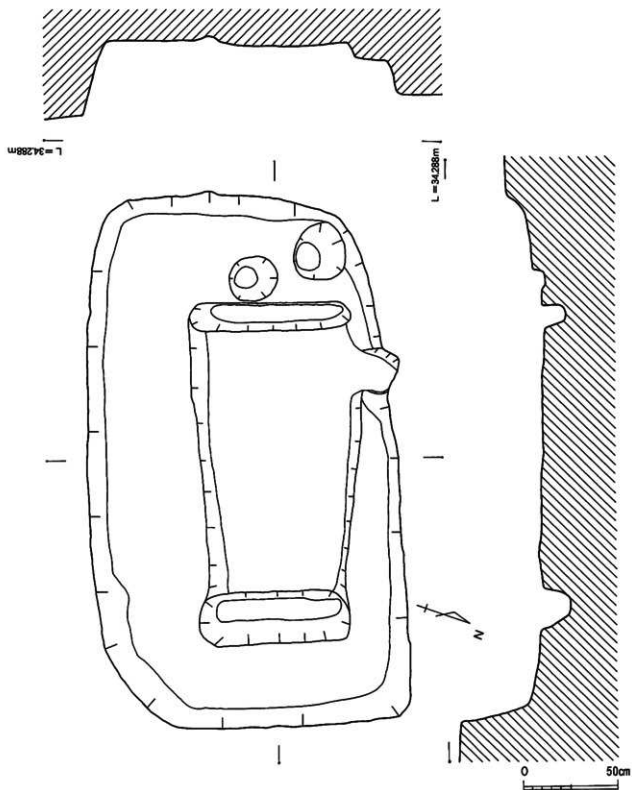
(1) 木棺墓 (第41図)

体育館西側でB-2区から11号壟棺と平行し東北東に主軸を向ける形で検出された。長さ2.8m、幅1.65mの土抗の中央に端板のための掘り込みを2ヶ所に配し、内側で長さ1.5m、幅0.7mを測る木棺墓である。

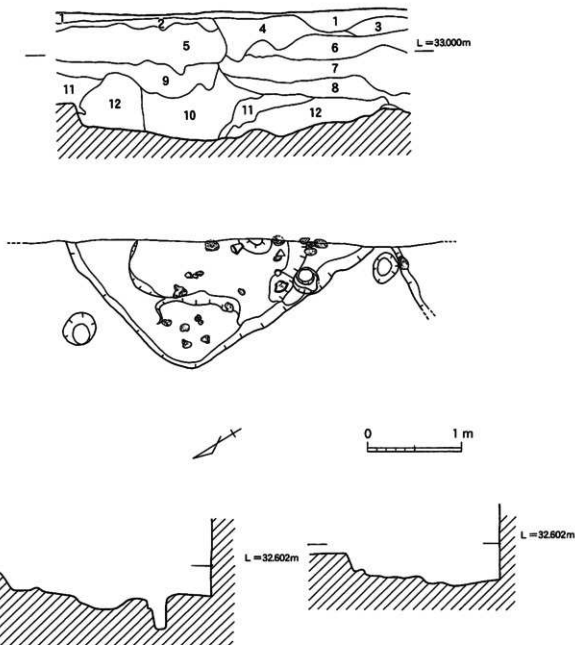
3 住居跡の調査

(1) 1号住居跡 (第42・43図)

体育館西側のB-2、3区及びC-2、3区に跨る様に位置していた。主軸をほぼ南北に向けているが、調査区の関係から竪穴住居の一部しか検出できなかった。現状では北側壁面が2m、西側壁面が2.5mを検出したが規模等は不明である。壁は20cm強の高さを残しており、床面には硬化面は確認できなかった。遺物も床面からは少なく埋没段階での混入を思わせる出土状況であった。



第41図 木棺基実測図

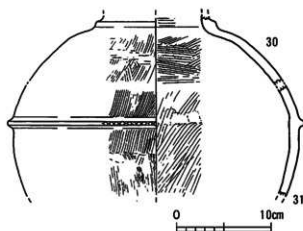


第42図 1号住居跡実測図

層序

調査区の東端にあたっていたため地表からの層序を確認できた。

- 1層 表土層 砂および砂利層。
- 2層 明暗褐色土層 砂利を含み体育館建設時に入れたものか？
- 3層 明暗褐色土層 黄褐色土がまだら。
- 4層 明暗褐色土層 礫を含みぼろぼろで締まりがない。
- 5層 茶褐色泥砂礫土層 締まりがない。
- 6層 暗褐色泥礫土層 締まりがない。



第43図 1号住居跡出土遺物実測図

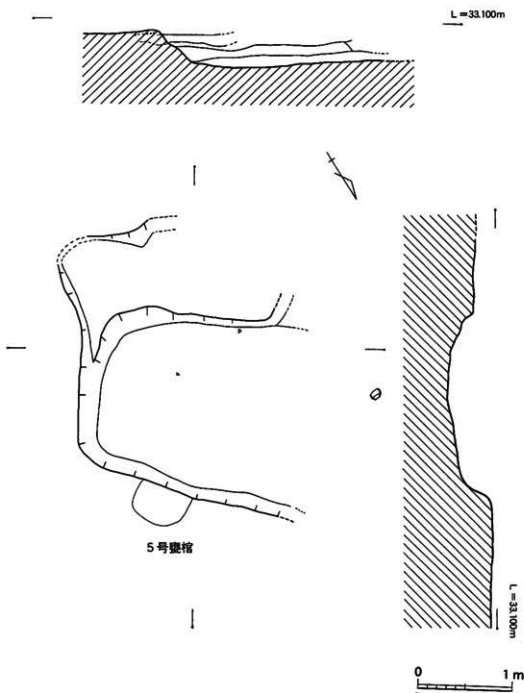
- 7層 暗褐色混礫土層 やや締まりがある。
 8層 暗褐色混礫土層 締まりがなくぼろぼろしている。
 9層 黒褐色土層 黄褐色の土が入りやや粘性あり。
 10層 暗褐色土層 黄褐色の地山ブロックを多く含み
 締まりは少ない。
 11層 黄褐色土層 地山ブロックを含みやや締まって
 いる。
 12層 黒褐色土層 やや締まり粘性が強い。

遺物 (第43図)

30と31は接合面の確認はできなかったが器面調整や胎土の状況から同一個体と判断した壺である。頸部と胴部に凸帯を巡らし、胴部には刻み目を入れている。

(2) 3号住居跡 (第44・45図)

体育館東側のB-5区で5号甕棺を切りながら構築しており、その後1号溝に切られていた。そのため全容はつかめなかった。床面には硬化面が見られていた



第44図 3号住居跡実測図

が調査の段階で掘りすぎて構築当時の床を露出してしまった。

南側には一旦床面まで掘り下げた後、張り床状のベッドが作られていたので住居跡と判断した。

遺物 (第45図)

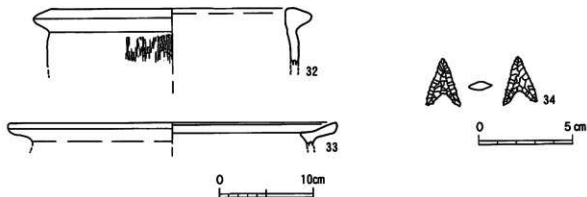
32は甕の口縁部の破片である。口縁部としては小さく短く断面が三角形を呈している。33も甕の口縁部破

片であるが、薄くて小児甕棺である。34は完全な形の石鏃である。

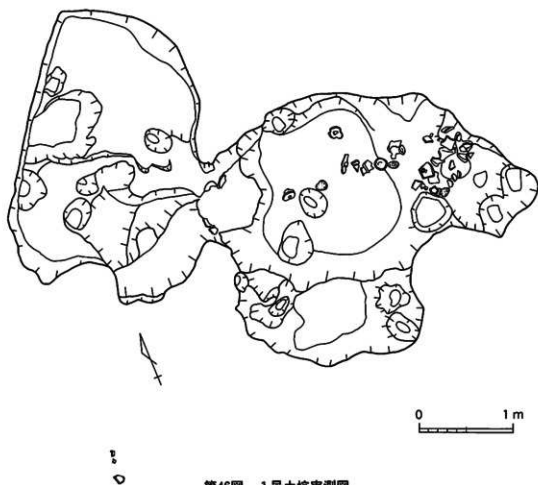
4 土坑の調査

(1) 1号土坑 (第46・47図)

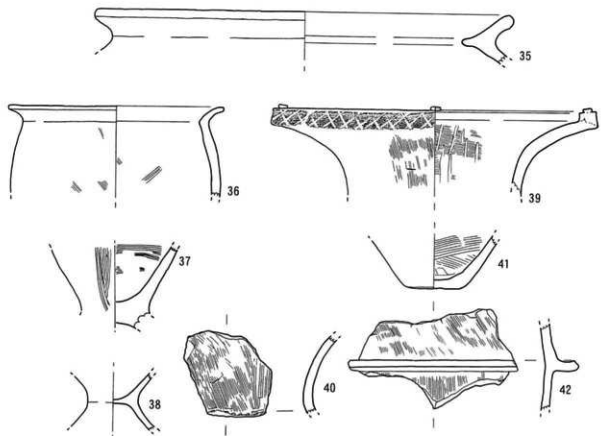
体育館北側のD・E-3区で確認された不整形な土坑である。弥生後期前半の土器が集中して出土してお



第45図 3号住居跡出土遺物実測図



第46図 1号土坑実測図

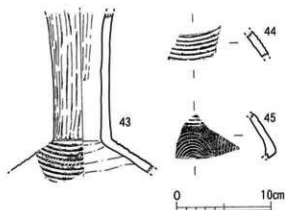


り、墓の可能性は低い。性格は不明である。

遺物は縄文式土器 1 点を含み、弥生式土器が中心で出土しているが免田式土器の長頭壺が 3 個体分確認できた。方保田東原遺跡ではこれまで出土した事が無く菊池川中流域においても数少ない貴重な資料となった。縄文式土器は後段でまとめて紹介したい。

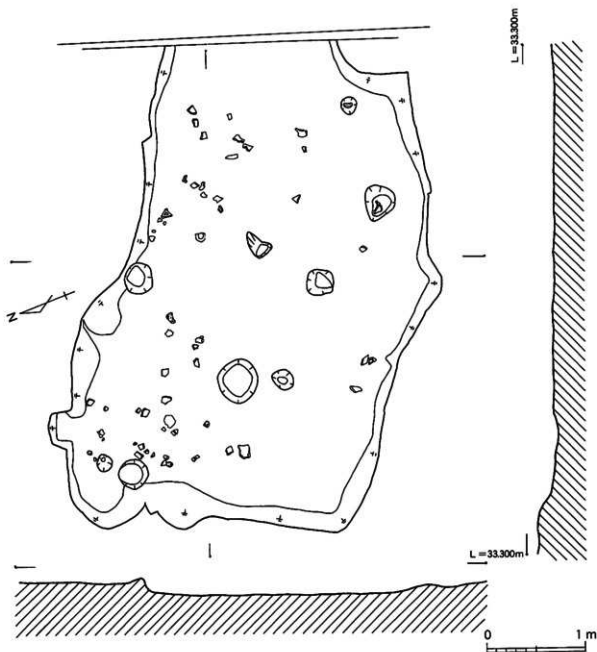
遺物（第47図）

35は甕棺の破片で口縁部のみである。36は甕の口縁部の破片である。37も甕の破片で底部である。脚台を欠いている。38は甕の底部で脚台の一部である。39は壺の口縁部の破片である。口唇部は一段高くなり外側には櫛目により「X」状に刻みを施し、上部には円形貼付文を 2 個ずつ配している。40も壺の口縁部の破片である。頸部に刻みを配している。41は壺の底部である。42は甕棺胴部の破片である。大きな凸帯を配しており、3号、4号、6号甕棺に類似している。43は免田式土器である。長頭壺で胴部下位と口縁部の一部を欠いている。肩部には 10 条の沈線を巡らし、間には刻みを施している。この壺では胴部の下位でない



第47図 1号土坑出土遺物実測図

と重弧文は見ること出来ないようである。44も免田式土器の破片で肩部である。沈線 5 本を確認できた。43や45とは内面の焼成の色が異なっているので別個体である。45これも免田式土器の破片である。算盤玉状の胴部の一部で上部に沈線、下位には 8 本の重弧文 2 個を描いている。43とは沈線の幅が異なり別個体である。



第48図 2号土坑実測図

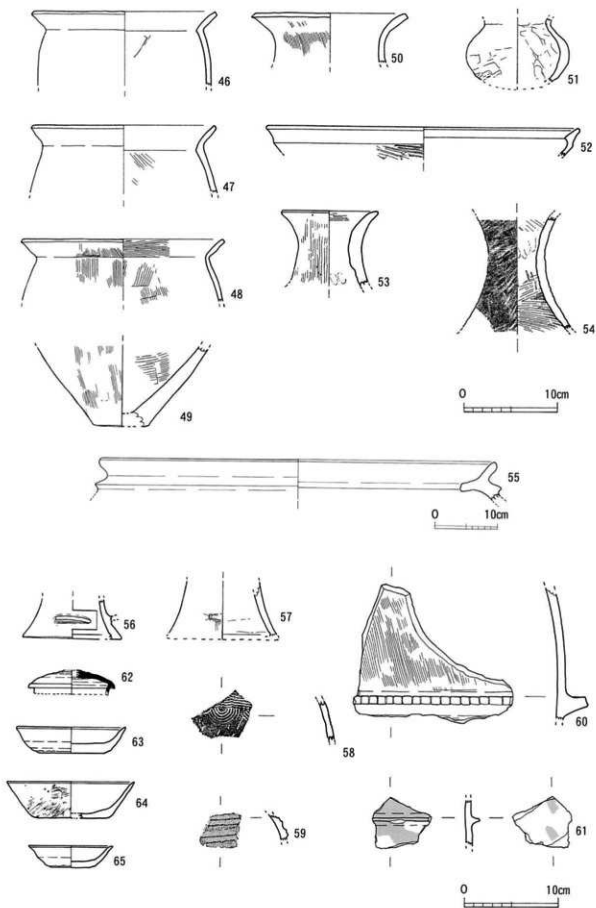
(2) 2号土坑 (第48・49図)

体育館東側のD-5区にある土坑で、縦4.8m以上、横3mの長方形の形状である。弥生式土器のほかにも須恵器や中世の遺物を混入しており、時間的には中世の所産と判断した。

遺物 (第49図)

46、47、48は甕で口縁部から胴部上位の破片である。49は甕の破片で平底である。50は壺の口縁部の破片である。51は手製の小型壺の破片である。頸部から胴部

下位までであるが、粘土の接合面を確認できる。52は高杯の破片で口縁部のみである。53と54は器台の破片である。55は甕棺の破片で口縁部のみである。口縁部は反り気味に開き直下に凸帯1条を巡らしている。56と57はジョッキ形土器である。共に把手を欠損しているが焼成は良好である。58は壺の破片で櫛歯文による重弧文と沈線が見られる。59は丹塗壺の破片である。胴部で4条の凸帯を巡らせている。60は甕棺の胴部片で凸帯には刻み目が見られる。



第49图 2号土坑出土文物实测图

61は丹塗り甕の破片である。胴部に1条の凸帯を巡らし、内面では丹の滴が垂れて付着した状況が観察できる。顔料が液体の状態であることが理解できる。

62は須恵器の坏蓋である。63、64、65は土師器の坏である。

(3) 3号土坑 (第50・51図)

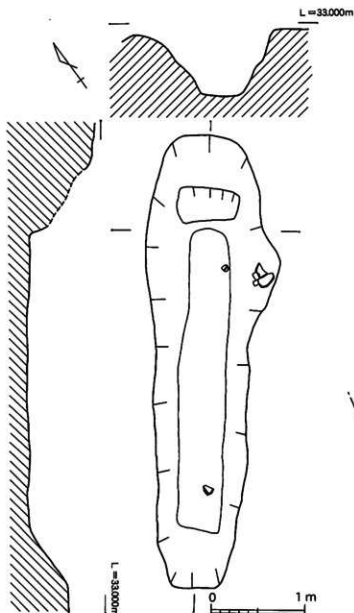
体育館東側のB-5区で1号溝に沿うように掘られている。長さ4.8m、幅1m、深さ0.7mで細長い土坑である。焼土や硬化面は確認できず、中から半欠状態の白磁碗を出土した事から中世以降の所産と判断した。

ブール建設に伴う調査の際にも同様の土坑が確認されている。

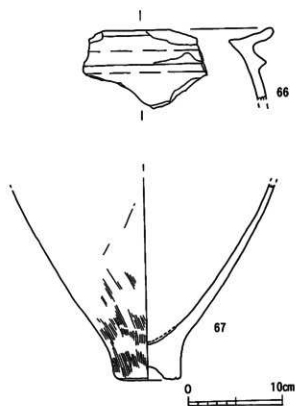
遺物 (第51図)

66は甕棺の口縁部片である。口縁部の直下に1条の凸帯を巡らしている。

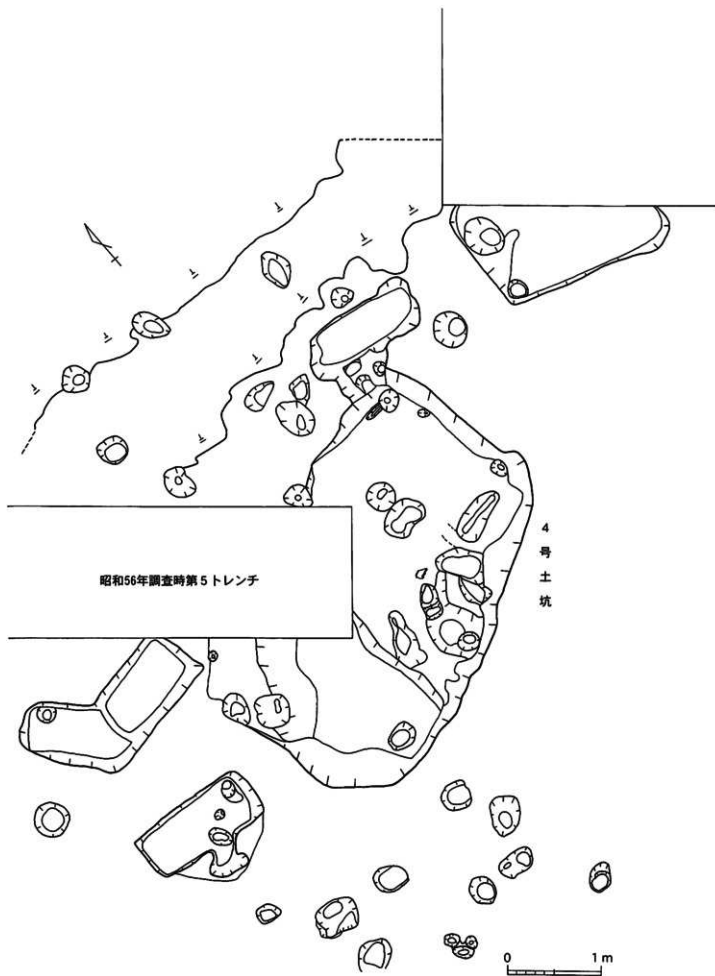
67は甕棺の破片である。口縁部から胴部上位までを欠いている。底部は小さな上げ底で脚台とは言い難い形状である。胴部には煤の付着が見られ煮沸から埋葬甕に転用したものである。



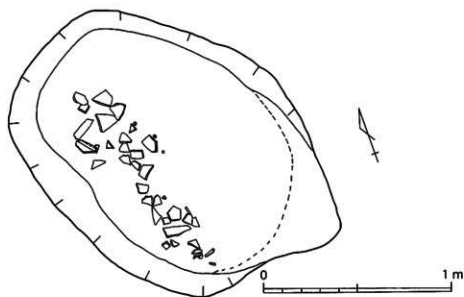
第50図 3号土坑実測図



第51図 3号土坑出土遺物実測図



第52図 4号土坑実測図



第53図 5号土坑実測図

(4) 4号土坑 (第52図)

体育館西側のC-2区を中心に広がっている土坑でかなり攪乱を受けていて外形が不整形である。当初は住居跡ではと考えていたが、規模と攪乱の状況から一応土坑としている。なお昭和56年校舎改築工事に伴う調査の第5トレンチに切られていた。

(5) 5号土坑 (第53図)

体育館下のB-4区で確認された土坑で小判形の形状であり、中から土器片がまとまって出土したが、実測に耐えるものはなかった。土器捨て場の性格が強いが、床は比較的固く締まっている。

5 溝状遺構の調査

(1) 1号溝 (第10・54・55図)

体育館東側で体育館に沿うように長さ13mを確認したが、南には調査区外に延びている。北側はC-5区において2号溝と直角に合流していた。溝自体は上部幅6.6m、下部幅1.8mを測る。

断面図① (A-5区北側断面)

ここでは西側斜面を調査区外に延ばしているが、断面は逆台形を呈している。溝内の堆積層序は西側から流れ込んだような堆積である。近くから須恵器大甕の口縁部が出土しているが、高さから埋土に伴って流れ込んだ可能性が高い。

断面図② (A-5区西側断面)

ここは①と直角に交わる部分で溝の西側斜面の断面であり、基本的な土層は同じであった。ここでも西側から流れ込んだ様子を示している。

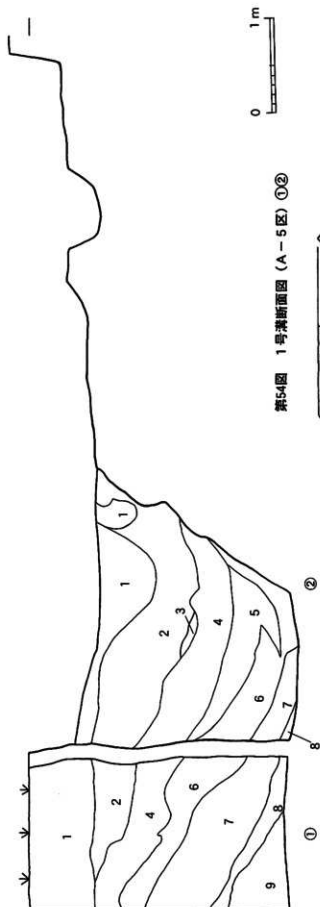
堆積層序

- 1層 黒色土層
- 2層 淡黄色混砂土層
- 3層 黄色混砂土層
- 4層 淡黒色混砂 土層
- 5層 淡黒色混砂 土層
- 6層 黄色混砂土層
- 7層 黒色土層 黄色土粒混入。
- 8層 黒色土層
- 9層 礫層 地山

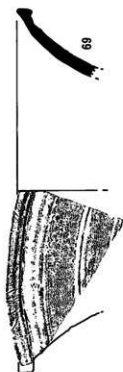
遺物 (第55図)

68は弥生時代後期の壺の破片である。口縁部のみで複合口縁である。69は須恵器の大甕口縁部の破片である。経塚古墳に伴うものであろう。これらは転落の可能性が高く、溝の時期決定には至らない。

70は土師器の皿である。底部は糸切り底で、灯明皿であろう。

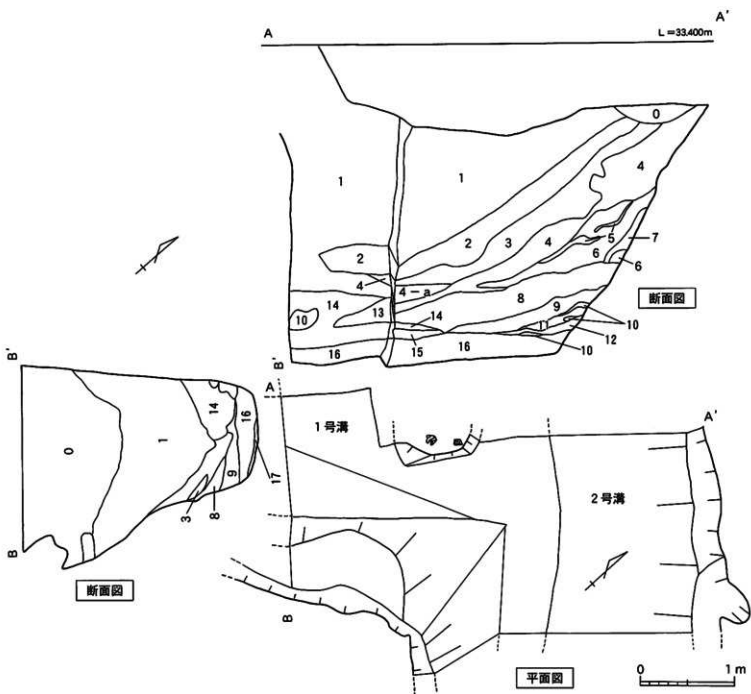


第54图 1号薄断面图 (A-5区) ①②



第55图 高城城址剖面图 1





第56圖 1号溝・2号溝合流点実測図 (C-5区) ③

(2) 2号溝 (第10・56・57・58図)

体育館下のC・D・E-4区を一直線に北側に延ばし、南は直角に曲げて東に一直線に延ばす溝で、C-5区では1号溝と接していた。現状では全貌は明らかではないが中世城に関する遺構であろう。

昭和56年校舎改築工事に際し第6トレンチで確認された溝との関連性も考慮に入れるべきである。この時は南側からの埋土の流入が観察されている。

断面③ (C-5区) (第56図)

1号溝と2号溝の合流点で前後関係を明らかにしたかったが、16層が一面に堆積しており同時期に存在していたことが確認された。埋没の過程では違いが見られるが1号溝も2号溝も一連の構造であることが判明した。

堆積層序

- 1層 褐色土層 礫を含み一時期に埋めている。
- 2層 黒色土層 やや粘性強し。
- 3層 暗褐色土層 黄色土粒含む。
- 4層 黒色土層 2層と類似。
- 5層 黒色土層 4層より黒く粘性強し。
- 6層 黄色粘質土層
- 7層 黄褐色粘質土層
- 8層 礫層
- 9層 暗褐色土層
- 10層 黒色土層 5層と類似。
- 11層 黄色粘質土層
- 12層 黄色砂層
- 13層 黄褐色土層 黒色土粒を含む。
- 14層 黄色土層 12層に類似。
- 15層 黄色砂層 12層に類似。
- 16層 褐色土層 礫を含む。

断面④ (C-5区) (第57図)

V字形に近く上部幅3.4m、下部0.7m、深さ2.6mで現地表から3mの深さであった。ここでも溝壁傾斜は北側(内側)が緩やかで、南側(外側)が急である。溝構築後自然堆積しているが9層下で一且溝をさらえたようで、その後再び堆積し北側から流れているようである。

堆積層序

- 1層 表土層 運動場の砂。

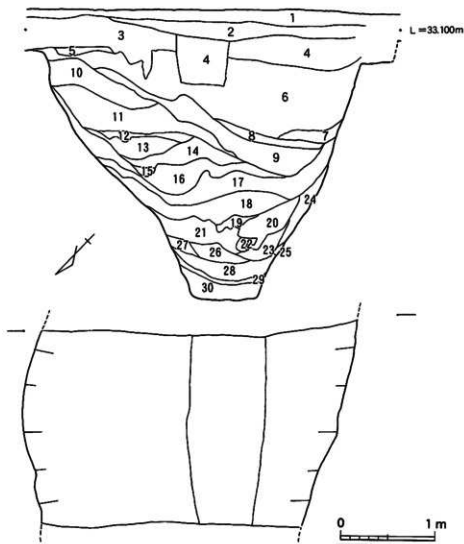
- 2層 表土層 砂混じりの灰褐色土層。
- 3層 攪乱層 4層に近い、やや締まっている。
- 4層 攪乱層 水道管理設時。
- 5層 暗褐色土層 黄褐色の土粒を含み締まりがなく砂も含む。

- 6層 暗茶褐色混粒土層
- 7層 黒褐色土層 黄褐色土がブロックで含まれ、炭化粒もある。

- 8層 茶褐色砂質土層
- 9層 茶褐色砂礫土層
- 10層 暗褐色混砂土層
- 11層 茶褐色砂礫土層 やや締まりなく炭化粒含む。
- 12層 暗褐色粘質土層
- 13層 黄褐色砂質土層
- 14層 黄褐色砂質土層 暗褐色粘質土を含む。
- 15層 黄褐色粘質土層
- 16層 暗褐色粘質土層 黄褐色土を含む。
- 17層 明褐色土層 地山ブロックを含む。
- 18層 黒褐色粘質土層 締まっている。
- 19層 黒褐色粘質土層 黒褐色土混入。
- 20層 黒褐色土層 硬い。
- 21層 黄色粘質土層
- 22層 黒褐色土層 黄褐色土を含む19層に類似。
- 23層 黄褐色粘質土層 21層より黄色強し。
- 24層 暗褐色混砂土層
- 25層 黄褐色混砂土層
- 26層 黄褐色砂層 粘土を含む。
- 27層 黒褐色混砂土層
- 28層 白色砂礫層
- 29層 黒褐色土層 礫を含む。
- 30層 黄褐色砂層 礫を含む。

断面⑤ (E-4区) (第58図)

ここでは上部を削平されているため幅が不明である。現状では上幅2.6m、下部幅0.8m、深さ1.6mを測る。溝の壁傾斜は東側(内側)が緩く、西側(外側)が急になっている。さらに埋土の堆積は東側から流れ込んでいる。その中でも4~7層は礫を含んだ層が多く、溝を全面覆うように堆積しており、短期間で大量に流れ込んだ状況を示している。



第57図 2号溝実測図 (C-5区) ④

堆積層序

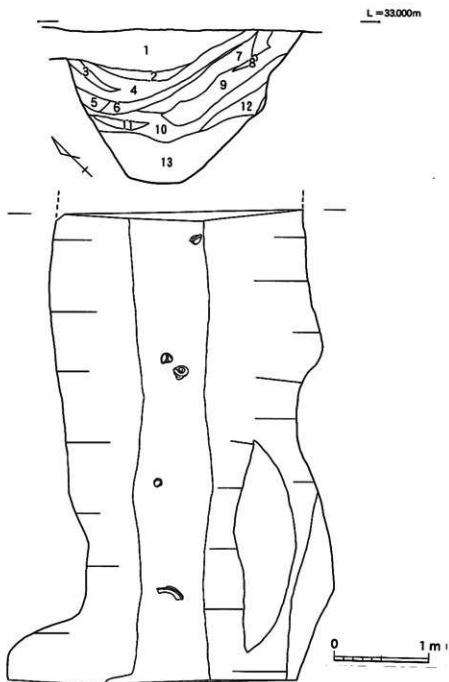
- 1層 礫層
- 2層 黒色土層
- 3層 黄色混砂土層
- 4層 褐色混砂土層
- 5層 黒色土層 2層に同じ。
- 6層 暗褐色混砂土層
- 7層 黄褐色混砂土層
- 8層 暗褐色土層
- 9層 褐色土層
- 10層 暗褐色土層
- 11層 礫層
- 12層 黄褐色砂礫層
- 13層 暗褐色土層

建築物の内側に土塁の存在を窺わせるように埋土の流入が認められた。

遺物としては甕棺口縁部、青磁碗底部、貝殻が出土している。溝の時期は青磁の出土から考え、中世の所産である。

遺物 (第59図)

71) は甕棺の破片である。口縁部のみであり、合せ口甕の上甕に口縁部を欠いたものがあるがその口縁部ではないかと考えられる。72も甕棺の頸部の破片である。73 (39-1) も甕棺の口縁部破片で小児用である。74 (39-2) は小型の甕の破片であり、表面には煤の付着が著しい。75 (37-1) は甕の脚台である。76 (38-1) は壺の口縁部の破片で、77 (37-3) は免田式土器の破片である。算盤玉形の胴部片で重弧文2



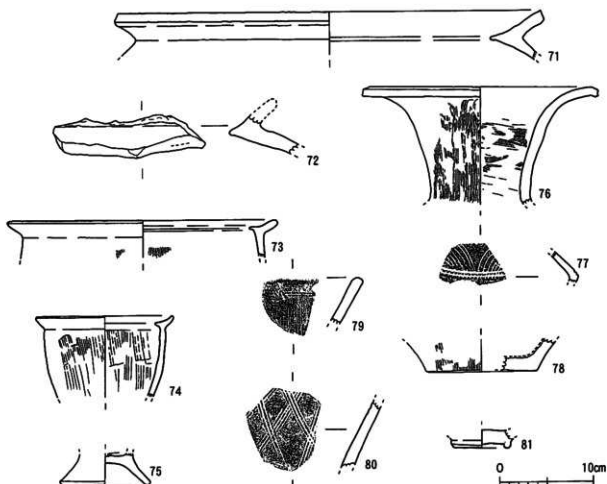
第58図 2号溝実測図 (D・E-4区) ⑤

点を確認できる。2号土坑から出土した免田式土器とも別個体である。78 (38-2) は甕棺の底部である。79 (40-1) は須恵質の播鉢である。内面には8本単位のすり目で刻んでいる。80 (37-1) は瓦質土器の播鉢の破片である。4本単位のすり目で内面を刻んでいる。81 (P-2、36-2) は青磁碗の底部である。高台全面に軸葉がかかっており、僅かに内面のみがかかっていない。見込みには模様は見られない。龍泉窯系である。

6 その他の遺構の調査

(1) 建物跡 (第9図)

体育館下のB・C-3・4区に跨っているもので、円形に礎群が集まって基礎石となっていたものである。2号溝埋没後に建てられており3間 (6.4m) × 4間 (8.5m)以上の規模であるが、攪乱をうけているため全貌は確認できなかった。さらに明確な時間的位置づけをするに足る資料が共伴しなかったため時期は不明である。しかし礎の間は1間を7尺 (212.1cm) で規



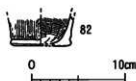
第59図 2号溝出土遺物実測図

格しており、建築史の面から1間の寸法の歴史と比較すると年代が近似値として得られるものと考え。ちなみに慶長12年(1607)名古屋城天守は7尺で1間であった。

7 遺物

(1) 3号墓棺北側ビット出土遺物(第60図)

82は3号墓棺の北側にある小さなビットの埋土から出土した鉢である。底部は平底で胴部は直線的に立ち上がっている。内面には明瞭に刷毛目が残されている。



第60図 3号墓棺北側ビット内出土遺物実測図

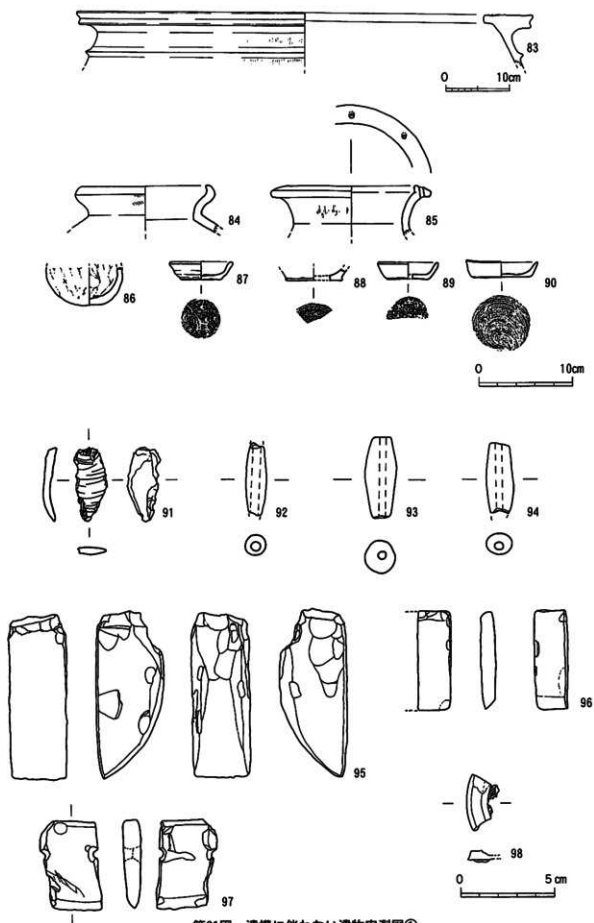
(2) 遺構に伴わない遺物(第61～67図)

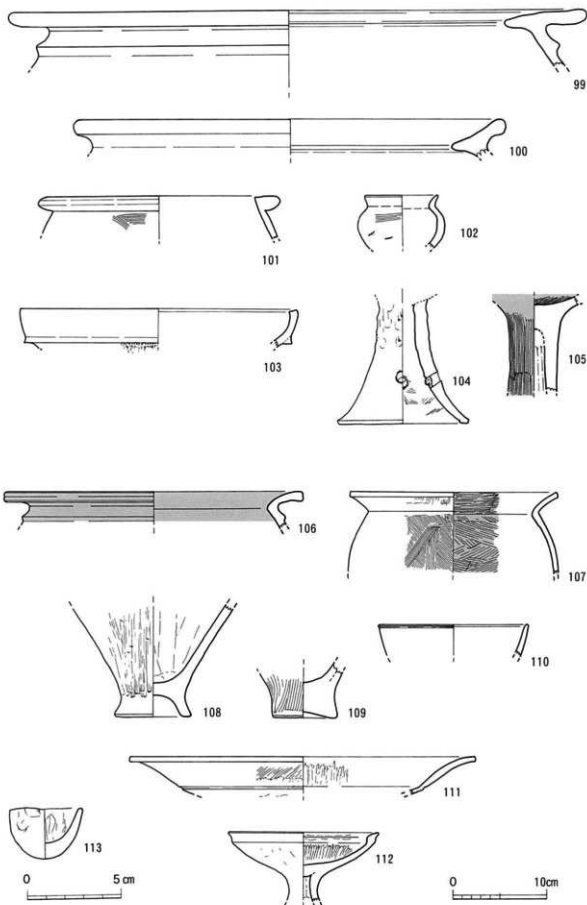
① 体育館西側調査区(B-2、C-2区)出土の遺物(第61図)

83は大型の甕棺口縁部の破片である。口唇部は窪み、口縁部直下に1条の凸帯を巡らせている。一部が体育館西側調査区から出土しており二次的にはあるが20m以上の離散状況が確認できた。84は袋状口縁蓋である。85は蓋の口縁部の破片である。2個の穿孔が6cmの間隔を持って穿たれており、蓋を固定する際の穴である。恐らく対峙する形で4個の穿孔が存在していたものと思われる。86は手捏ね土器である。内面には指の痕跡が多数見られる。

87、88、89、90は土師器の灯明皿である。90はほぼ完形で灯明の煤が口縁部に付着している。全て底部は糸切りである。

91は黒曜石の剥片で、周辺に使用痕を残している。92、93、94は土鍾で重さはそれぞれ3.5g、11g、5.7





第62図 遺構に伴わない遺物実測図②

gであった。

95は柱状片刃石斧の破片である。中位から刃部まで残しており使用による剥離が僅かに見られる。石材は砂岩で縞模様が顕著に認められる。

96は扁平片刃石斧で縦に半欠状態である。長さは5.2cmで幅は2.3cmを残している。一部に微細な赤色顔料が付着している。97はB-2区出土の石包丁の破片である。2個の穿孔部分から両端が折れており大きさは不明である。

98はB-2区から出土した青銅鏡片である。これは水洗中に確認したもので出土地点は不明で残念至極である。11号変棺周辺であろうと思われるが断定できない。現状では長さ3cm、幅1.5cm、重さ7.7gであるが、復元直径6.4cmとなる。ブロンズ病が進んでいるが一部には光沢を留めており舶載鏡の特徴を残している。幅8mmの平縁で内側に飾文を配しているところから、鏡型は内行花文日光鏡もしくは重圈文鏡であろう。

② 体育館下調査区(A~E-3~4区)出土の遺物 (第62・63図)

99は変棺の口縁部破片である。口縁部の幅がかなり大型の甕である。口縁部直下には凸帯を1条巡らしている。

100は変棺の口縁部破片である。頸部に剥離している。101も甕の口縁部破片である。煤の付着が著しい。102は小型の壺の破片である。103は鉢の破片である。口縁部直下に1条の凸帯を巡らしている。104は高杯脚部の破片である。腰部に穿孔を配しているが貫通していない。105は高杯の脚部で表面には赤色顔料を塗布している。

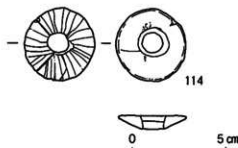
106は丹塗り甕の破片である。口縁部直下に1条の凸帯を巡らしている。107は内面朱付着の甕である。

108は甕の脚部から胴部にかけての部分である。脚は低く大きく窪んでいる。胴部には煤の付着も確認できる。109は変棺の底部である。底部は僅かに窪んでいる。110は鉢の口縁部破片である。111は高杯の口縁部破片である。

112も高杯で脚部を欠いている。口縁部は短く小さい。113はミニチュアの鉢である。丸底で極めて小さい。

114は紡錘車である。直径3.8cm、孔径1cmで裏面を

平坦にし、表面は中心部が厚く、断面が山形になり厚さ6mmであった。表面には放射線状に32本の線刻がある。中心の円孔は下が広がる形である。石材は柔らかな表面で淡い緑色をしている。



第63図 遺構に伴わない遺物実測図③

③ 体育館東側調査区(A~C-5区)出土の遺物 (第64・65図)

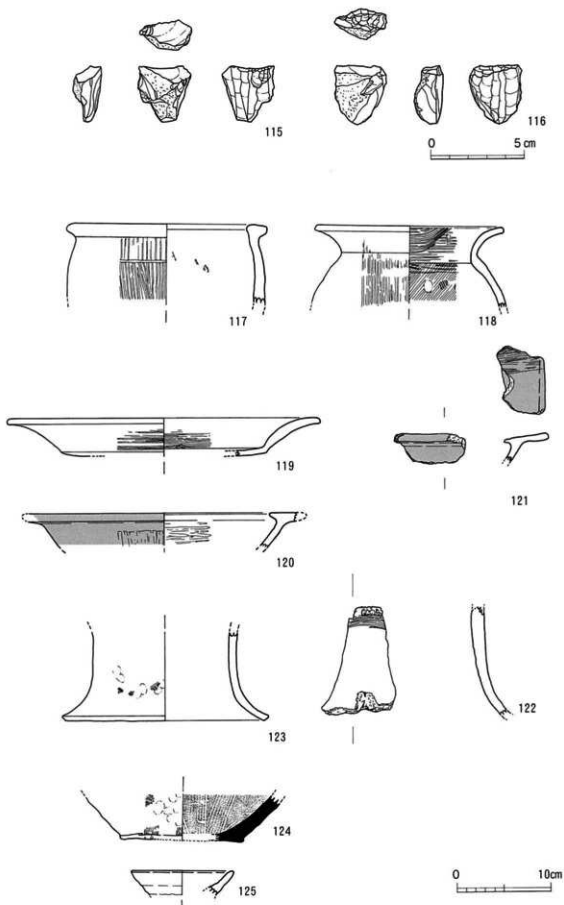
115と116は調査終了後整理の段階で確認できた資料で調査担当者としては痛恨の極みである。旧石器時代の遺物で共に細石核である。不純物を含まない黒曜石で佐賀県伊万里市の「腰岳産」である。熊本県立装飾古墳館池田朋生主任学芸員の所見では「野岳・体壇型の石核」であるとのことで、背面には自然面を残し、上部は平坦面を作り出し下に向かって5~6条の細石刃剥離痕を残している。方保田の台地上では初めての旧石器時代の遺物といえる。今後の調査対象を再考すべきであろう事を示唆した資料である。

117は甕の口縁部破片である。口縁部の直下に1条の沈線を巡らしている。煤の付着が著しい。

118は壺である。肩部内面には成形段階での指の圧痕が5個見られる。119は高杯で口縁部の破片である。内面に僅かではあるが赤色顔料が付着している。120も丹塗り高杯である。口縁部の幅が異なるため106とは別個体である。121も高杯の口縁部破片である。全面丹塗りで口縁部上面には暗文を施している。122も高杯で脚部の破片である。上部には沈線5本を巡らしている。123は脚である。

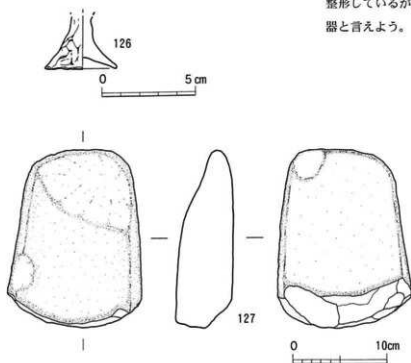
124は瓦質土器の擂鉢の破片である。内面は7本単位のすり目がある。125は土師器皿の破片である。

126はミニチュア土器である。上部に器面の剥離が見られ甕の脚部のようなものである。現状では杵形器台のようにも見える。127は石杵である。下端部を剥離し、

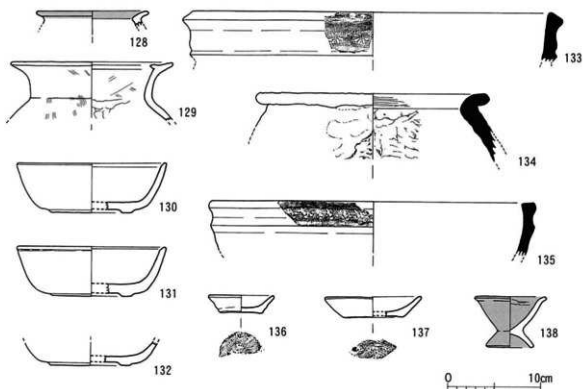


第64図 遺構に伴わない遺物実測図④

整形しているが使用の痕跡は認めがたい。未使用の石器と言えよう。



第65図 遺構に伴わない遺物実測図⑤



第66図 遺構に伴わない遺物実測図⑥

④ 一括資料（第66・67図）

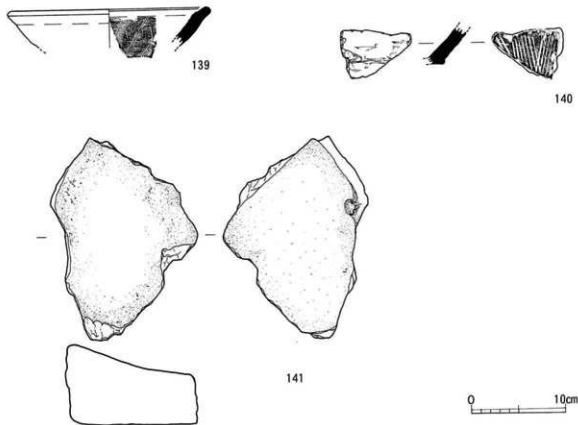
128はミニチュアの甕の口縁部片で丹塗りである。
129は壺の口縁部片で焼先口縁である。

130、131、132は白磁碗の破片である。低い高台で、見込みに重ね焼きの痕跡を残している。口縁部の形状と色彩に違いが見られ別個体である。133は瓦質土器の火舎である。口縁部直下にスタンプによる菊花文が施されその下には小さな凸帯を巡らしている。134は瓦質土器の甕である。器面の剥離が著しい。135も瓦質土器の破片で火舎である。口縁部直下にスタンプによる文様が施され凸帯も巡らしている。136と137は

土師器の皿である。底部は糸切りで灯明皿である。

138はミニチュアの甕で全面丹塗りである。139は須恵質の擂鉢である。7本単位のすり目がある。口縁部には僅かに段を形成している。140（60-2）も須恵質の擂鉢であるが、焼きが甘くもろい。内面には粗い7本のすり目がある。

141は石臼である。周辺を剥離しているため全体の大きさは不明である。内面のみならず外面においても研磨が著しく、僅かながら赤色顔料らしい色彩をとどめた土が付着しているようである。



第67図 遺構に伴わない遺物実測図⑦

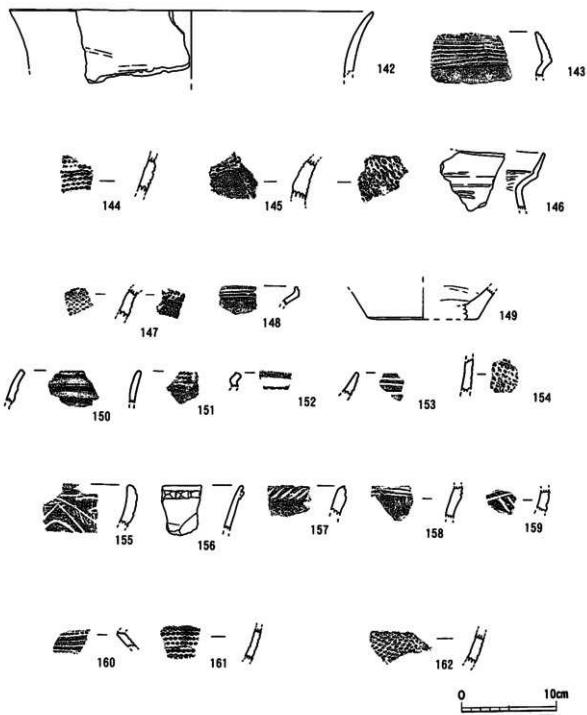
⑤ 縄文土器（第68図）

遺構に伴って出土しているものもあるが、混入の可能性が高いのであえてここで取り扱った。

142は深鉢の口縁部である。粘土接合面で剥離している。143も深鉢の口縁部である。こちらは「く」字に立ち上がり外面には沈線7本がある。これらは体育館下調査区から出土している。

144は1号土坑から出土した円形の押型文土器の破

片である。145は西側調査区から出土した押型文土器で口縁部近くの破片である。円形の文様が両面に見られる。146は東側調査区C-1区出土の深鉢口縁部で波状口縁になる。147は1号住居跡から出土した押型文土器の破片である。口縁部近くで内面と外面に楕円文を施している。148は1号土坑から出土した鉢の口縁部で、沈線と磨り消し縄文、刺突文2個も見られる。149は4号墓棺から出土した深鉢の底部である。



第68図 縄文土器実測図

150は1号変棺から出土した深鉢の口縁部である。151、152、153は9号変棺から出土したものでどれも口縁部である。154は13号変棺から出土した押型文土器の破片である。

以下で記述するものは一括資料で出土地点は不詳である。155は深鉢の口縁部片で沈線と磨り消し縄文を施し、口縁部が内湾している。156も深鉢の口縁部片

で、貼り付け凸帯に刻み目を施している。157も深鉢口縁部片で、斜めの沈線を施した北久根山式土器である。158、159は深鉢片で沈線が見られる。160は鉢の破片で西平式土器である。161と162は押型文土器の破片である。

8 まとめ

この遺跡はかつて大道小学校校庭遺跡としていたが平成8年度から15年度まで実施した遺跡範囲確認調査の中で方保田東原遺跡との間隔が見られず、大規模な遺跡となることが判明したため、方保田東原遺跡として取り扱うこととした。

大道小学校では校舎建設や講堂建設、体育館建設など数多くの開発行為が繰り返されてきた。そのような状況にもかかわらず数多くの遺構や遺物が発見されており、特に中国産の青銅鏡が出土していることは遺跡の重要性を物語っているものである。

今回の調査でも弥生時代では甕棺が13基埋葬状況を持続しつつ発見されたが、中には二次的な破壊を受けて破片として出土したものも見られた。方保田東原遺跡の中でもここ大道小学校が時期的にも先行し、甕棺についても集中して出土している。これらのことから、中期末から後期前半の埋葬地であることは確認できるが、それに伴う集落についてはいまだ詳細には明らかにされていない。今後の課題であるが、何れにしても方保田東原遺跡の中では重要な地域であることには変わりない。

小学校に残されている郷土史に記されている経塚古墳についても、埴輪の破片や須恵器などが出土したことで存在そのものは疑う余地の無いところであるが、残念ながら場所については特定することが出来なかった。

中世の溝については全容が不明であるが、方形区画が少なくとも2面存在している。さらに溝埋没後には根固め石のみではあるが建物も建てられていたことも明らかになった。中世には方保田氏が方保田城を築城しており、それに関連した遺構であると考えられるものである。

建物跡として7尺1間の時期について熊本大学名誉教授北野隆氏に御教示いただいた。

氏によれば畳の出現が戦国時代であり、畳の規格(6尺3寸×3尺1寸5分)によって1間が6尺5寸となっていく。

このため7尺1間の建物は畳を使わず、板張りのもので室町時代以前の可能性が高いとの事であった。

遺物としては旧石器時代の細石核2点が発見された。

方保田東原遺跡の周辺では初めての出土であり、今後とも注意深く探していかなければなるまい。縄文時代の遺物として押型文土器から晩期の黒色研磨土器に至るまでの土器が出土していた。縄文時代の遺構は確認できなかったが、少なくとも土器の出土から考えても人々が生活した事を物語る資料である。

青銅鏡の破片が出土したことも特筆すべきである。恐らく甕棺に共伴したものと考えられる。

11号甕棺内から出土したイモガイ製腕輪については内径が長径5cm、短径3cmと非常に小型であった。手首に装着した状態であれば細身の人物であれば可能であろうが、掌を通すためには極めて限られた大きさの人物であるか、余程小さいときに装着したか疑問が生じた。そこで同時に出土した歯について、山鹿市の歯科医師小嶋立州氏に意見を伺った。

小嶋医師によれば永久歯であり、乳歯ではないと断言された。歯冠部分しか残っていないが大臼歯も発達していた事と右上門歯が大きいところから幼児ではないことが理解された。反面、成人ではどの程度の年齢かを考えるには全ての歯に磨耗が見られず、特に大臼歯に至っても磨耗が見られないところから考えて若い青年層と推察された。

加えて顎頭部を中心に頭骨の一部も出土しており、小さくて薄いため若い年代の骨のようである。

いずれにしても胸にイモガイの腕輪を装着していた若い人物が埋葬されたものと考えられる。なお性別については特定できなかったが、立岩遺跡の例からイモガイ製貝輪の貝輪を装着したものは女性、ゴホウラ製貝輪を装着したものは男性であったことが発表されている。²⁷ この事から考えると女性の可能性が高い。

註7 立岩遺跡調査委員会編『立岩遺跡』河出書房新社 1977

Ⅶ プール改築工事に伴う調査（平成10年度）

1 調査の経過

1 調査に至る経過

大道小学校のプール改築工事が決定したのは平成10年3月市議会での予算議決で、その中で埋蔵文化財調査の経費も含んで計上していたものである。調査の必要性についてはすでに校舎建築工事（昭和56年度）や体育館改築工事（平成4年度）で行っており、教育総務課の担当も理解している。大道小学校における本格的な発掘調査は今回で3度目となる。

調査期間については学校からの要望で夏休み期間中に解体工事を行い、できるだけ早く調査を終了して欲しいとのことであった。また、夏休み期間中子供たちのプール使用はできるだけ長くしたいとの事で再三にわたり解体時期の調整を学校、教育総務課を交えて行った。その結果8月16日まで子供にプールを開放し、その後解体することとした。

調査は教育総務課から文化課へ委託を行い、実務については文化課で対応できないとの理由でさらに博物館へ依頼をする変則的な形をとった。実務の依頼に関してはこれまで行われてきたように文書での確認もされないまま半ば強制的になされてきた。博物館では企画展示のための調査を平行して行っており、専門知識を必要とする職場にはそれなりの人材を配置することが望ましいが、現状では少ない専門職員へのしわ寄せが年々厳しくなっている。

2 調査の経過

平成10年（1998）

9月9日（水）晴れ

8月17日からプール解体が実施され、ようやく本日から文化財の調査が開始できる状態となった。朝から資材運搬を実施し、現場小屋及び簡易トイレの設置を行う。プール本体の掘り込み跡が汚かったので、遺構検出を兼ねて整地作業を実施した。午後、教育総務課と協議し、プール本体には建設当時の削平によって遺構が残存していないため、プールサイドも含めて調査対象とした。なお、学校と民有地の境界から1m間隔をあげ調査区を設定し東西20m、南北36mの範囲を調査区とした。

9月10日（木）くもり

プールサイド東側の表土剥ぎ作業中に特殊器台片が1点出土。瀬戸内系の可能性が高い。プールサイド予定地はすでに攪乱を受けており、遺構の残りは悪いようである。

9月11日（金）晴れ

プール東側及び北側の遺構検出作業を行った。目立った遺構は確認できなかったが、遺物として石礫と磨製石斧が単独で出土した。西側では基礎栗石の列が出ており、かつてのプール外周にあったブロックの基礎であろう。

博物館考古学講座受講生の一人体験発掘を実施した。15名の参加があり楽しそうに作業を行っていた。

9月12日（土）晴れ

プールサイドの南側のほぼ中央から舶載鏡片1点が出土した。平縁の部分のみで形式は不明である。かつて方格規矩鏡が大道小学校校長室に保管してあったが、出土地の特定に至ってなかった。今回の鏡片の発見からかつてのプール建設に伴って発見された可能性も出てきた。

昨日の考古学講座受講生の行った発掘体験の場所であったことから、昨日出土していればどれだけ参加者が喜ばれたことであろうか。

9月16日（水）晴れ時々くもり

中村は、博物館開館20周年記念展準備で西日本地域の資料調査と借用に奔走のためしばらくの間現場から離れることとなった。

プールサイド西側は建物の基礎コンクリートや栗石が多くて作業が難航している。縄文晩期の土器片1点出土。遺構などは検出できなかったが、南側で赤色顔料が出始めている。

9月18日（金）晴れのちくもり、強風

台風16号の接近で作業は午前中で中止とし、台風対策を講じた。

10月3日（土）晴れ

プール南側はあまり遺構の残りが良くない、他の地区も同様の傾向である。

10月13日（火）くもり一時雨

本日で発掘作業はほぼ終了し、実測作業に移行してゆく。

10月14日(水)～31日(土)の間

遺構実測、遺物取上作業を集中して行う。

11月4日(水) くもり

調査区の土層断面図作成用に清掃作業を行っていたところ、調査区西側の壁面から家形土器の扉部分が出土する。

11月5日(木) 晴れ

家形土器出土地点を拡張することを教育総務課と協議し了承を得る。その結果西側へ30cm、南北170cm拡張した。家形土器のほぼ全容が明らかになり、明日記者発表を計画した。

11月6日(金) 晴れ

午前中家形土器周辺の実測を行い、午後2時より記者発表を現場で行った。

11月7日(土) くもり

実測図最終点検を行う。本日より博物館にて開館20周年記念展「弥生人のくらしと祭り展」開催、これに家形土器を展示し公開した。

11月12日(木) 晴れ

本日で現地調査を完全に終了した。遺構の破壊はひどかったが、舶載鏡片や家形土器など貴重な発見があつて十分な成果が得られた調査であつた。ますます方保田東原遺跡の重要性が高まった。

3 調査の組織

調査主体 山鹿市教育委員会

調査総括 中原 哲哉(教育長)

総括事務 瀬口 嗣生(教育総務課長)

松山 寛(教育総務課長代理)

脇山 義文(教育総務課主任主事)

事務担当 木上幸一郎(文化課長)

木村 理郎(課長代理兼文化振興係長兼文化財係長)

調査委託 山鹿市立博物館

隈 昭志(博物館 館長)

本田 猛夫(博物館係長)

八木田由美(博物館主事)

吉田 幹夫(博物館主事)

調査担当 中村幸史郎(市立博物館 副館長)

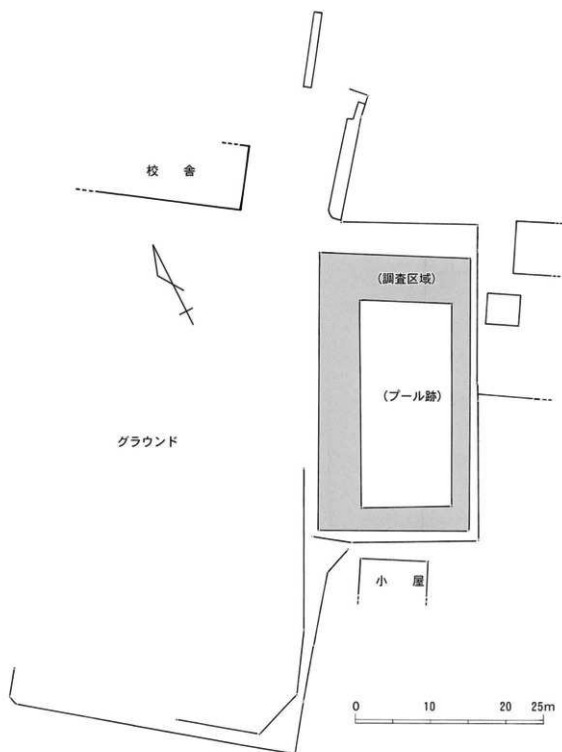
山口 健剛(文化課 主事)

前田 軍治(文化課 嘱託)

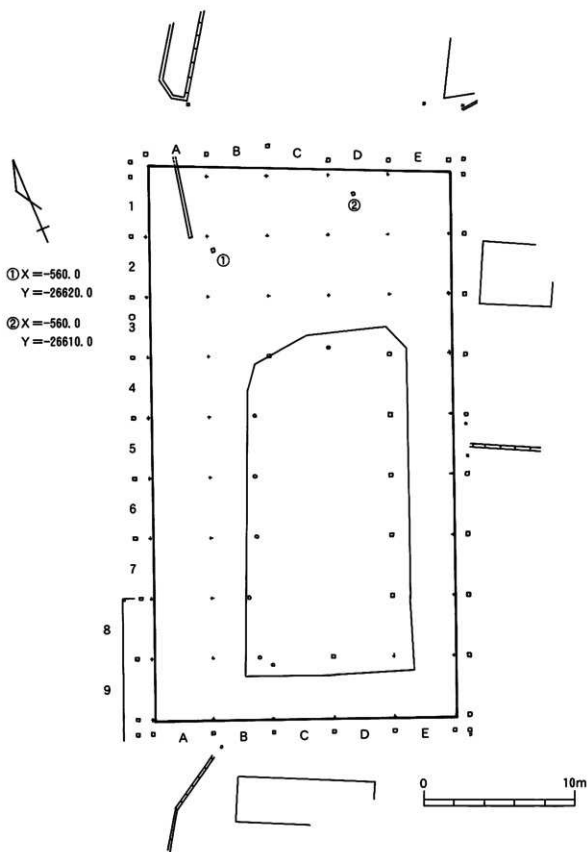
作業員 島崎貴代子、山崎絹子、木庭慶子、福本洋子、高橋道昭、堀京之介、堀比沙子、松山カチ子、宮崎静子、平尾トシ子、緒方正和、富田スミ子、奥村泰子、谷田みどり、森本タツ子、若杉教子、若杉敬子、武藤スミ子、武藤代子、坂本光、奥村千鶴子

整理作業 島崎貴代子、山崎絹子、木庭慶子、森みつよ、山口美智子、岡小夜子、城葉子、中山三恵子、小原朱実、宮田京子、大森よう子、野満彩子

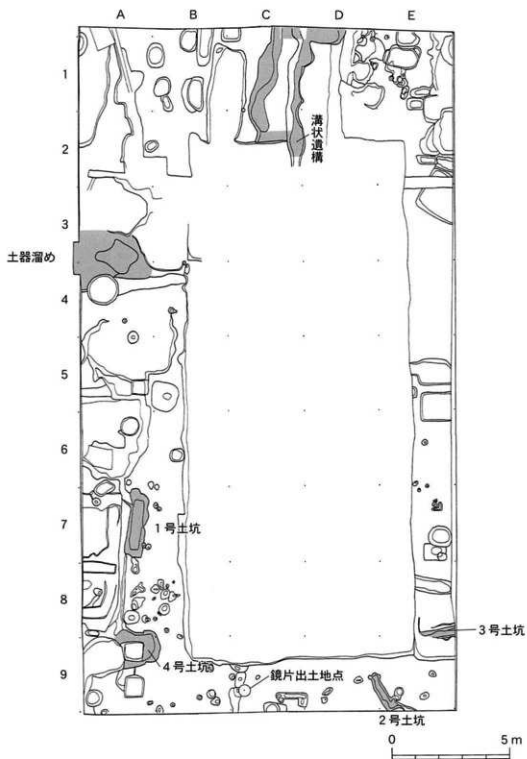
調査協力 市立大道小学校、文化財環境整備株式会社、前原設計事務所



第69図 平成10年度調査区配置図



第70图 調査区配置図



第71図 遺構配置図

2 調査の成果

1 調査の概要

大道小学校は方保田台地の西端に位置しており、学校の中では東端の場所にプールは築かれ、東側に民家と接する。今回の調査は古くなったプールをそのままの位置で改築することからほぼ同じ範囲での調査となった。

現場事務所と仮設トイレを設置するため、隣接地との境界線から北側で4m、東側と南側は約1m間隔をあけて東西20m、南北36mの範囲で調査区を設定し境界線の確保を行った。

調査区は4m四方でブロックを設定し、北西部コーナーを基点に東へA～E、南へ1～9の番号を付けブロックで遺物の取り上げを行った。

なおプール本体部分が東西12m、南北27mの広がりをもっており、一旦遺構確認のための清掃作業を行ったところ、攪乱を確認できたので調査対象から除外し、廃土置き場とした。いわゆるプールサイド部分のみの調査になったが、この範囲内でも以前の構築物でかなりの部分が破壊されていた。従って弥生時代の遺構として認識できた部分は極めて少なくなった。

2 遺構と遺物

弥生時代の遺構として確認できたのはA-3・4区の土器溜めおよび周辺の遺構とA-7区の土坑、E-8・9区の土坑であった。その他にはC-1及びD-1区における溝に伴う硬化面が確認できた程度であった。

(1) 土器溜め (第72図)

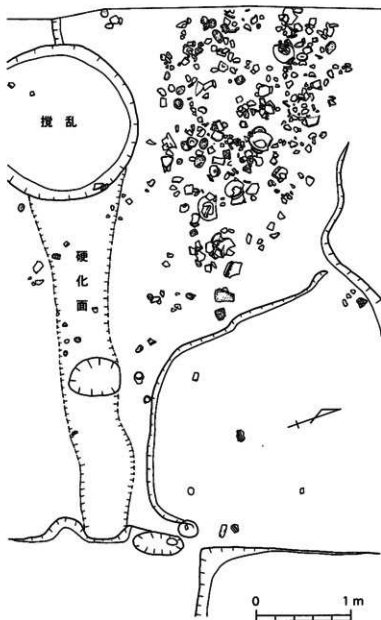
南側に長さ4m、幅50cm～1mにわたって硬化面が伸びており、西端は学校施設のために直径1.6mの円形に攪乱を受けているが、あたかも

通路的な役割を果たしていたかのようである。

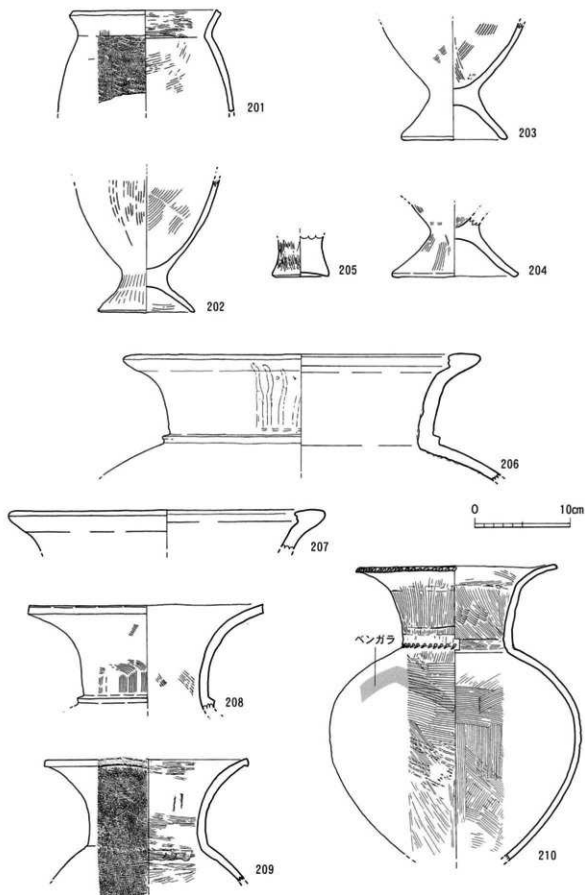
規模は不明である。家形土器の破片がたまたま西壁の断面に現れたため調査区を西側に拡張した経緯から、西側の運動場に延びている事が明らかである。今後の調査に期待するところが大きい。

ここでは弥生後期の土器をまとめて廃棄している状況であった。土器の破片が大きく、比較的形状が窺えるものばかりで破砕されたような状態ではなかった。

遺物は上層と下層に分けて紹介するが、相互で破片が接合したものもあり、短期間で廃棄された可能性が高い。



第72図 土器溜め上層遺物出土状況実測図



第73図 土器溜め上層出土遺物実測図①

遺物

上層の遺物（第73・74図）

201は甕の口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部は「く」の字状に折れ、胴部の張りは少ない。底部は脚台になる可能性が高い。器面は表面には叩き目の後刷毛目調整を行い、内面は粗い刷毛目である。煮沸による煤の付着が著しい。

202・203も甕である。胴部下位から脚台の底部までを残している。器面は全面刷毛目調整である。煮沸による煤の付着が著しい。204も甕の脚部である。205は小型甕の底部である。黒髪式土器の底部であり、煤の付着も見られる。

206は甕の破片で口縁部から肩部までを残している。口縁部は扇先形で頸部には1条の凸帯を巡らしている。胴部は大きく開いている。頸部表面にはへらによる器面調整が施されている。207は206と同一個体の可能性が高い。破片としても小さく206との接点は見出せなかったが、焼成や胎土の類似点が多い。

208は甕で肩部以下を欠いている。口縁部は大きく反りながら開いている。頸部には1条の凸帯を巡らしている。焼成はよく硬く焼き締まっている。209も口縁部から肩部にかけての甕の破片である。208と同様の口縁部の開きであるが頸部には櫛書き塵状文を巡らしている。

210も甕である。口縁部は大きく開き口唇部に刻み目を施している。頸部においても同一の施文具により刻み目を施している。口縁部内側と肩部には38と同様に赤色顔料を塗布していた。肩部にはL字状に描いている。211も甕の口縁部である。口縁部は大きく反りながら開いている。212も甕の口縁部のみの破片である。これまでの甕に比べると小さい甕である。接合状況から上層と下層に散在していたようである。頸部には櫛書きによる稚拙な平行文または横線文が施されている。

213は甕の破片で口縁部の一部である。表面に赤色顔料の塗布が認められる。214も甕の破片で肩部の一部である。櫛書きによる横線文と波状文を描いており、213と同様に赤色顔料の塗布が一部に認められる。215は底部を欠損している小型の甕である。口縁部は外反し、頸部には櫛書きによる横線文と波状文を描いてい

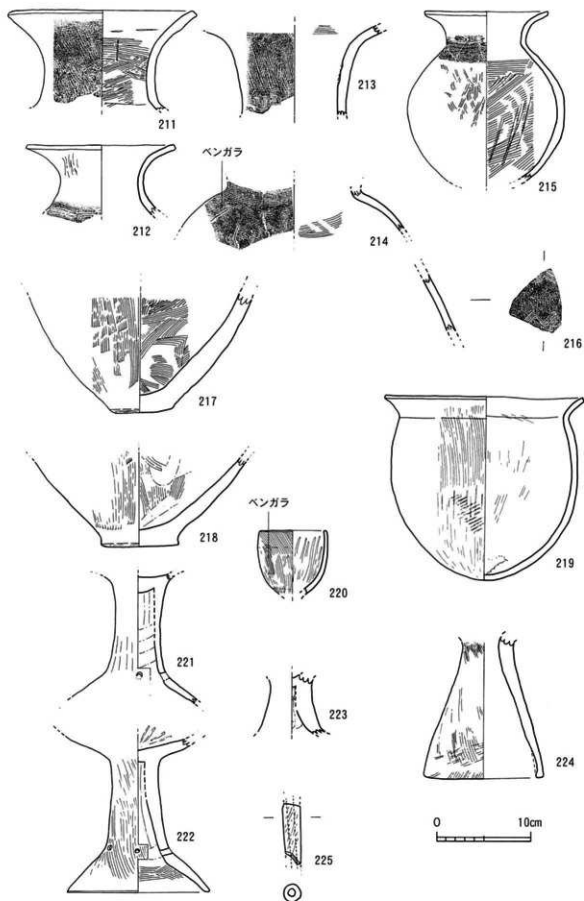
る。

216は甕の胴部の破片であるが直線的であるところから疑問が残る。櫛書き波状文を2段に描き、へら研磨で不規則に暗文を施し赤色顔料の塗布が確認出来る。217は甕の底部付近の破片である。底部は小さな平底で内面には漆黒の付着物が見られる。煤ではなく、油脂成分を含んでいるようである。218も甕の底部である。しっかりした平底である。

219は鉢である。一見甕の様であるが、火を受けた痕跡が見られないところから鉢とした。口縁部から頸部にかけて発色の悪い赤色顔料が塗られている。220は242と類似した小型の鉢である。底部を欠いているが脚台であろう。表面に赤色顔料の塗布を認めることが出来る。

221は高杯の脚部である。2個の穿孔を確認できる。222も高杯で杯口縁部を欠いている。脚部に4個の穿孔を配している。223も高杯の脚部で小型のものである。

224は器台である。在地系でくびれの強いものである。225は土鍾である。



第74図 土器溜め上層出土遺物実測図②

下層の遺物（第76～79図）

L=33.600m

228は脚台を有していた家形土器である。極めて珍しく、発掘された当時は九州では初の出土であったが、その後福岡県小都市横隈上内畑遺跡で2例目が出土している。^{註8}

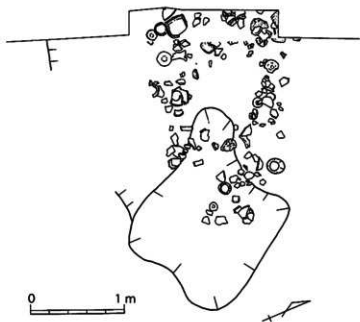
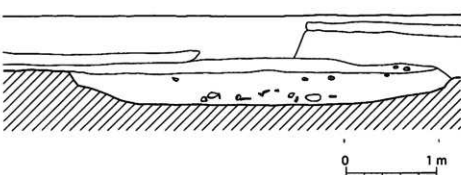
屋根は見られないが4隅の柱部分の上端が剥離している事と、壁面上端の直下に水平に細い線が刻まれていることから屋根の製作に関連した線刻であると推察した。

基本的には壁面に3本の柱を配し2間四方の家である。正面の壁には右側に出入り口の扉を表現している。そのため他の壁面の間柱が中央にあるのに対し、正面の間柱は僅かに左側に寄った形で作られている。扉には中央に取っ手が作られ上下の付け根には丸く縁取りをし、右側には「戸受け」が見られる。扉は右端の上下に円柱状の突起を作りつけ、上下に円孔を穿った部材で挟み、そこを軸に回転させて開閉するものである。扉の直下に幅1cmで僅かに窪んだ部分が見られる。恐らくこの建物に入るための梯子が固定されて

いたものであろう。壁部分は板壁、泥壁、草壁何れかは断定できないが、小都市の例から判断すると板壁の可能性が高い。柱の間には2本の貫板状の凸帯を配しているが、正面では全て剥離し痕跡のみが観察できる。

裏面はほぼ完全な姿で残っていた。3本の柱の上端は剥離しており、屋根へと続くものと推察できる。左右の面は一部欠損していたが状態は良好である。全ての壁は上から見ると僅かに膨らんでいる。さらに赤色顔料も各面において部分的に塗布されている。

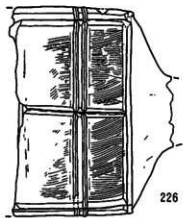
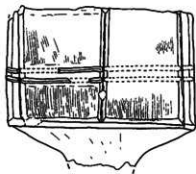
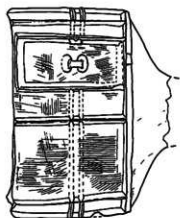
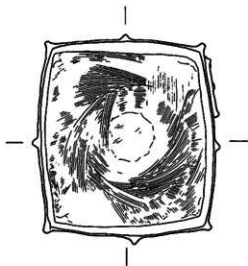
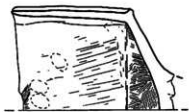
註8 『横隈上内畑遺跡2』小都市文化財調査報告書第143集 2000年



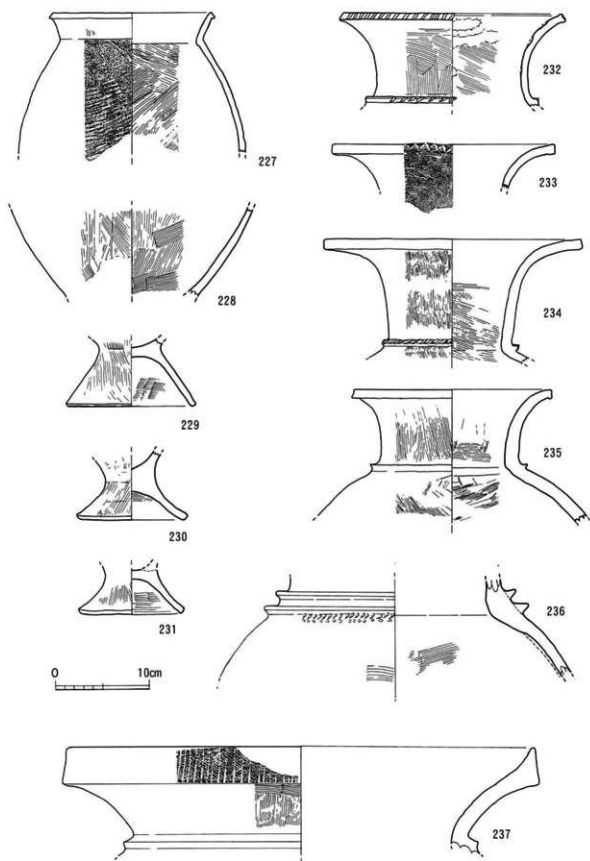
第75図 土器溜め下層遺物出土状況実測図

227は甕の破片である。口縁部から胴部の一部を残している。底部は脚台になると思われる。外面を粗い叩きの後に刷毛目調整を施し、内面は粗い刷毛目であった。228は甕の胴部下位の破片である。229は甕の脚台である。脚は大きく大型の甕である。230と231も甕の脚台である。

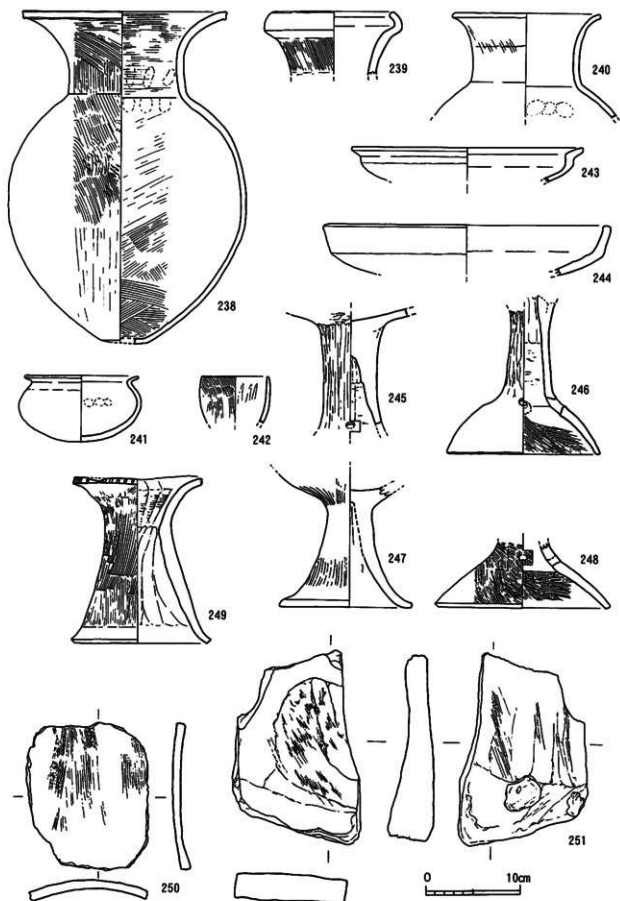
232は壺の口縁部である。口縁部は外反しつづつ広がり口唇部には刻み目を施している。頸部には1条の凸帯を巡らしておりここにも刻み目を施している。233は壺の破片で口縁部の一部である。口唇部に山形に刻み目を施している。234も口縁部から頸部にかけての壺である。232と類似しているが口縁部の開きが大きく、口唇部には刻み目が見られない。235も壺で口縁



第76图 家形土器实测图



第77図 土器溜め下層出土遺物実測図①



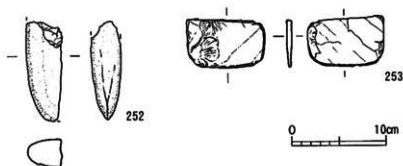
第78図 土器溜め下層出土遺物実測図②

部から肩部の一部を残している。上層と下層から出土した破片が接合している。頸部に凸帯を有しているが刻み目は見られない。236は壺の頸部から肩部の破片である。頸部には2条の凸帯が回り、直下に刻み目を配している。特異な壺である。237は大型壺の口縁破片である。口唇部には腹状文を施し、頸部には1条の凸帯を巡らせている。

238は広口壺である。口縁部は大きく開き口唇部はなで仕上げである。頸部にも施文は見られず胴部の貼り付け文などは見られない素朴な壺である。しかし、口縁部内と胴部には赤色顔料の塗布が見られる。口縁部内には幅1cm、長さ10cmの赤色顔料が2本縦に描かれ、胴部には1.5cm～1cm幅でし字状に描かれていた。239は小型壺の口縁部である。袋状口縁で立ち上がりは短い。240も壺である。口縁部から肩部を残している。

241は小型の鉢である。口縁部の一部を欠損しているが、ほぼ完全な形である。242は220と類似した形状

の鉢である。底部は欠損しているが脚がつくものと思われる。243と244は高杯の杯部の破片である。245は高杯脚部である。裾部を欠いているが2個の穿孔が確認できた。246も高杯脚部で、裾部の一部を欠いている。裾部は膨らみながら広がっており、4個の穿孔が見られる。247は口縁部を欠く高杯で、杯部は深くなりそうである。248は高杯脚裾部である。2個の穿孔を確認できるが本来は3個の穿孔であろう。249は器台である。口縁部の一部と裾部の一部を欠いている。口唇部には刻み目を施している。250は土器片を再利用した土製品である。周囲を剥離し小判状に整形している。251は砂岩製の砥石である。4面は使用による研磨面が残し、1面は自然面を、1面は剥離面を残している。自然面に近い部分では熱による赤化が見られる。使用頻度は高かった様で使用面は薄くなっている。252は磨製石斧の破片である。253は石包丁の未製品である。輪郭を作った段階である。側面と刃部に研磨の痕が見られる。



第79図 土器溜め下層出土遺物実測図③

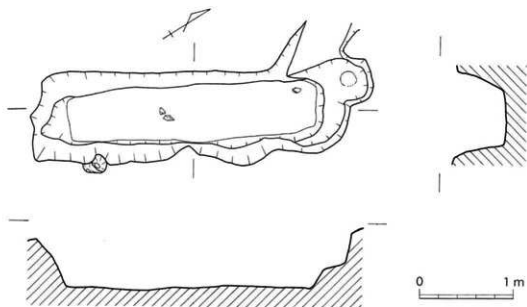
(2) 1号土坑（A-7区）（第80図）

長さは上部で3.4m、下部で2.6m、幅は上部で1m、下部で0.6m、深さ0.4mの土坑である。遺物は少なく僅かに3点が出土した。遺物から判断すると中世城に関連する時期である。体育館改築工事に伴う調査に際して、同様の3号土坑が確認されており関連性が高いと考えられる。

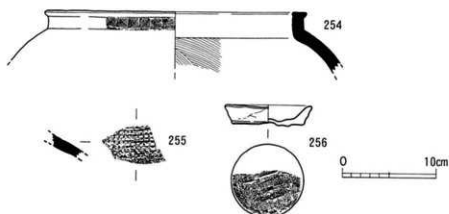
遺物（第81図）

254は瓦質土器である。口縁部の立ち上がりにスタンブによる雷文を施している。255は須恵器片である。表面には格子の叩き目を残している。256は土師器の

皿で半分しか残っていないが、口径9cm、高さ2.4cmを測り底は糸切りの後板目痕が残る。水分を多く含んだ粘土で製作したため糸切りで切り離した後細い板の上に置いたものと推察された。



第80図 1号土坑実測図



第81図 1号土坑出土遺物実測図

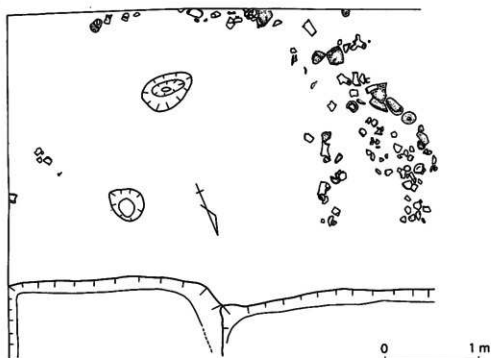
(3) 2号土坑(D、E-9区)(第82・83図)

不整形な土坑である。現状では長さ3m、幅0.5～0.8m、深さ0.2mの規模で、南に伸びている。上面には弥生後期の土器片が散乱し、下面は北端部に土器片が散在している。

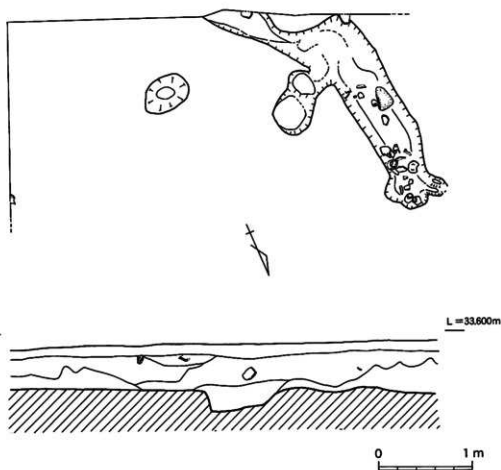
遺物(第84・85図)

257、258、259、260は甕の脚台である。261は壺の口縁部から肩部にかけての破片で口唇部に刻み目を施し、頸部には1条の凸帯を巡らしている。262は壺の口縁部の破片で、大きく開く大型の壺である。263は頸部から肩部にかけての破片で、頸部には1条の凸帯

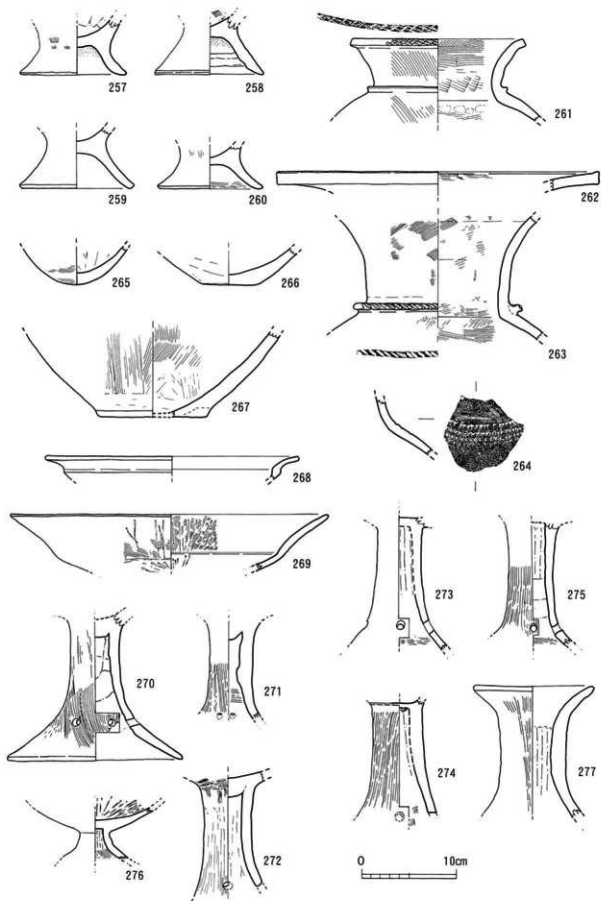
を巡らせ刻み目を施している。264も壺の破片で肩部に簾状文を施している。265、266、267は共に壺の底部である。268と269は高杯の口縁部破片である。270～275は高杯の脚部で全て杯部を欠いている。全てに穿孔が見られる。276は脚付の鉢である。277は器台で裾部を欠いている。278は縄文土器で波状口縁部になり器面の剥離が見られる。279は黒曜石製の石鏃である。二次的な剥離を受けているため形状が石鏃のようにも見える。280は凹石である。敲打によるものである。P.L15-1は軽石で全面に研磨の痕が見られる。用途は不明である。



第82图 2号土坑上层实测图



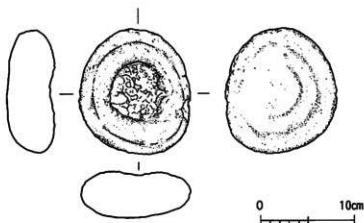
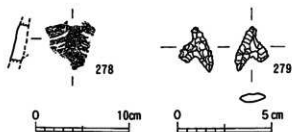
第83图 2号土坑下層・断面实测图



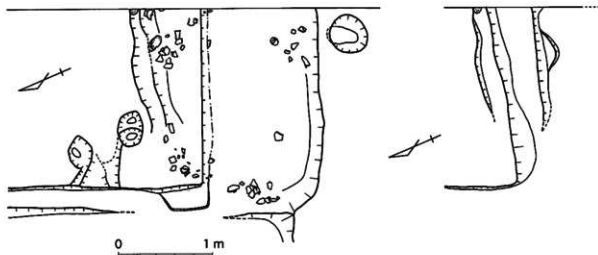
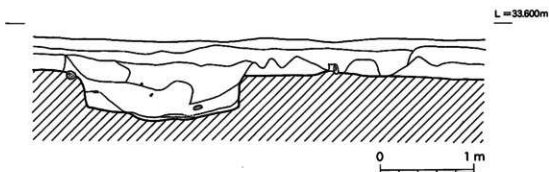
第84图 2号土坑出土遗物实测图①

(4) 3号土坑 (E-8、9区) (第86図)

長方形の土坑で東側は調査区域外に伸びていた。現状で長さ2.2m、幅2m、深さ0.5mの規模であった。さらにこの土坑埋没後に赤色顔料を含んだ掘り込みがあったが、遺物の出土は見られなかった。



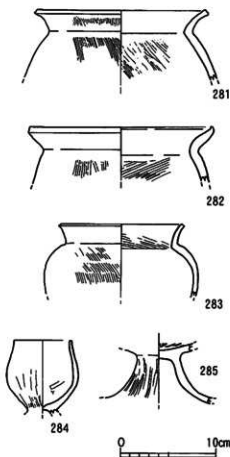
第85図 2号土坑出土遺物実測図②



第86図 3号土坑上・下層・断面実測図

遺物 (第87図)

281、282は甕の破片で口縁部から胴部にかけての部分である。口縁部が281では外反し、282では内湾している。283は鉢の破片である。284は脚付の鉢でガラススタイルである。口縁部との接点は見られないが一個体であることは間違いない。285も脚付の鉢である。



第87図 3号土坑出土遺物実測図

(5) 4号土坑 (第88図)

縄文土器を出したということで縄文土坑としていたものである。後世の擾乱がひどく形状は不明である。

遺物 (第89図)

286は脚付の鉢で、287は器台の破片である。288は軽石製の凹石であるが半欠状壊である。両面に窪みが見られる。

(6) 溝状遺構 (C-1、D-1区) (第90図)

調査区北側壁面には溝の断面が顔を覗かせ北東部から西に3.5mの地点から10m地点の範囲で溝の断面が観察できた。しかし、本体はブル建設に伴って破壊されており、その結果僅かに黒く帯状に南に伸びる層が見られる程度で残っていた。

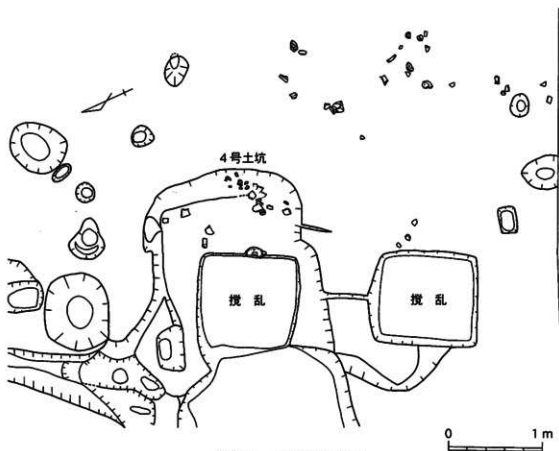
黒色層は幅1.5m～1m、長さ5mで南に伸びている。表面は極めて硬く、硬化が著しかった。道路状遺構かと思えるものであった。土層断面図から見ても溝の上幅は5m、下幅2m、深さ0.7mで溝とすれば浅いし、幅が広すぎる感じがしないでもない。

層序

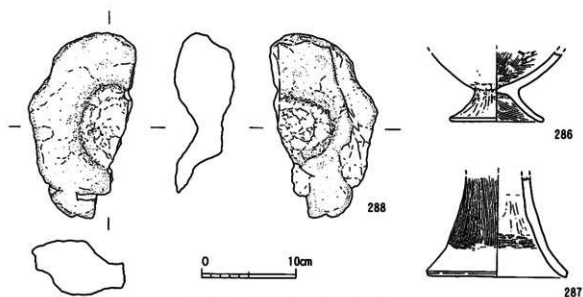
- 1層 明黄褐色土層 砕石、小礫多数含む。
- 2層 暗黄褐色土層 埋土、大小の礫多い、近代陶器混入。
- 3層 黒褐色土層 溝終焉時期。
- 4層 暗黄褐色土層
- 5層 黄褐色土層
- 6層 黄褐色土層 黒色土のブロック混入が多い。
- 7層 明黄褐色土層
- 8層 暗黄褐色土層 部分的に黒色土のブロック混入、上面に硬い部分あり。
- 9層 暗褐色土層
- 10層 黒褐色土層 硬化している。
- 11層 暗褐色土層 溝構築直後。

遺物 (第91図)

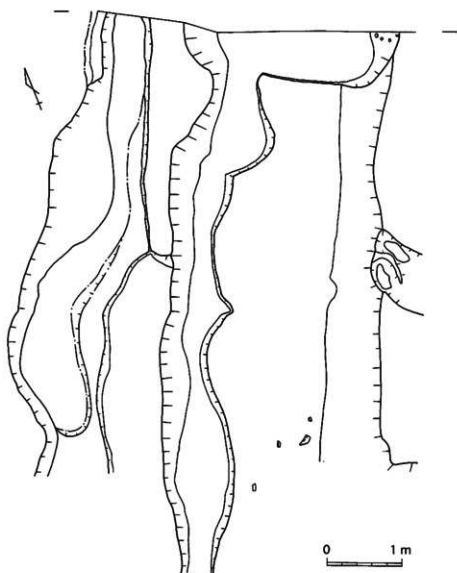
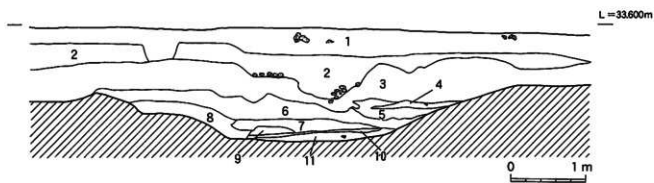
遺物は実測に耐えるようなものは確認されなかったが、僅かに289のみである。甕口縁部の破片であるが、これまでに無く内傾している。



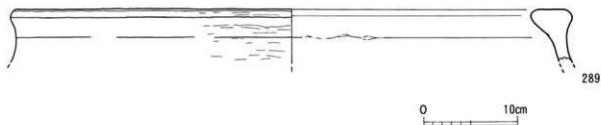
第88图 4号土坑实测图



第89图 4号土坑出土文物实测图



第90圖 溝状遺構実測図



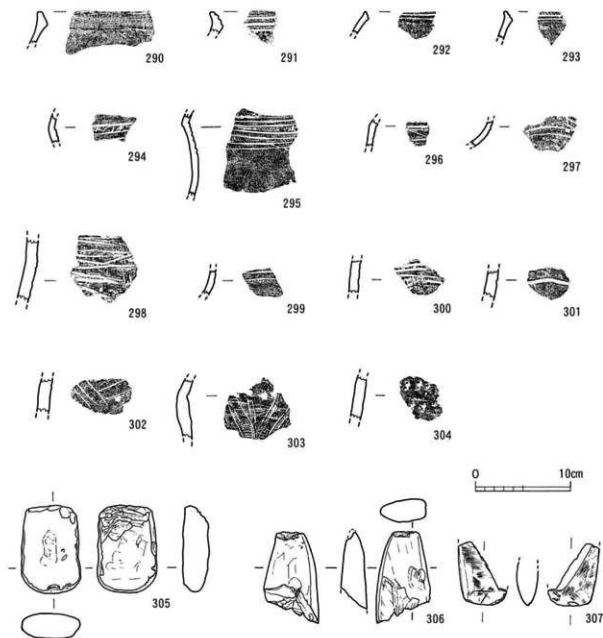
第91図 溝状遺構出土遺物実測図

(7) 遺構に伴わない遺物 (第92～95図)

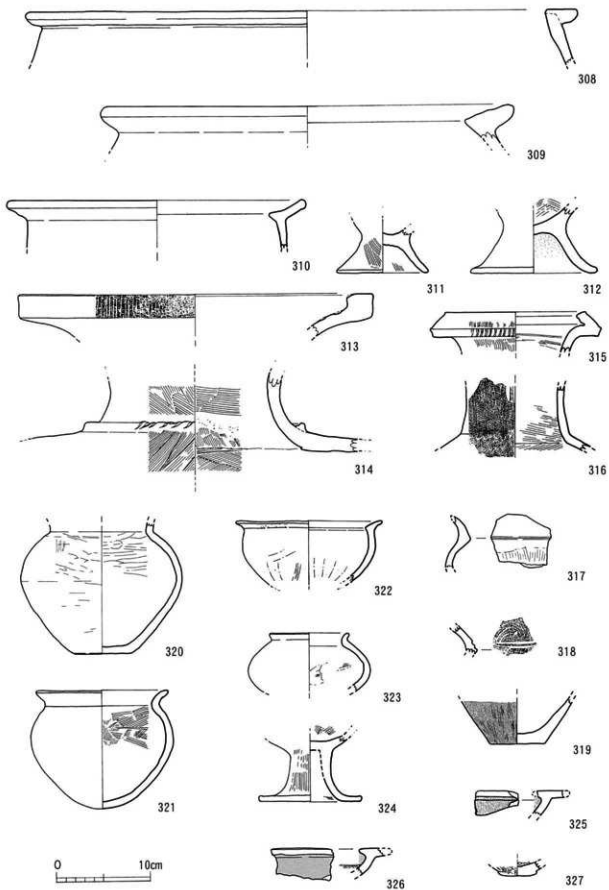
銅鏡 (PL15-3)

C-9区の標高33.226mの高さで出土した銅鏡片で

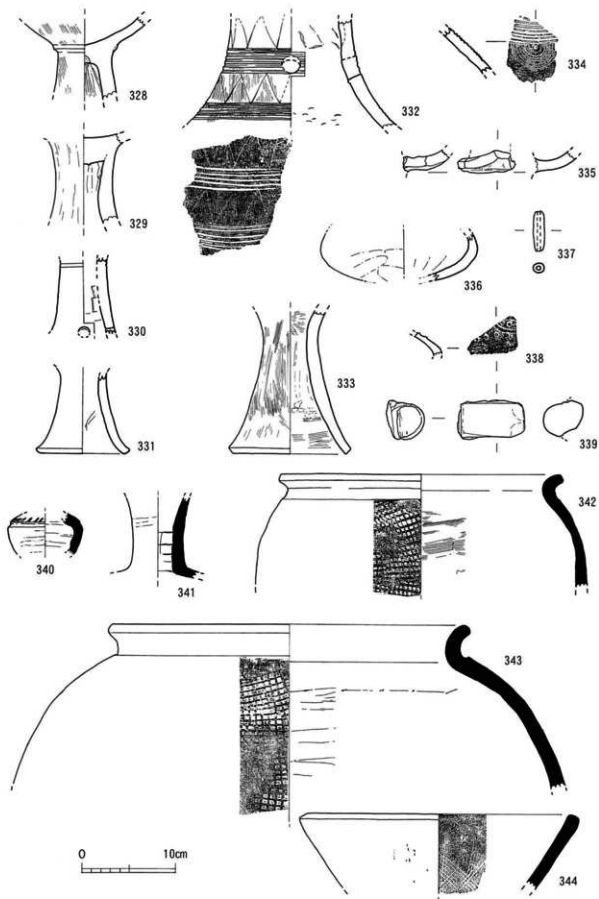
ある。下位から陶器片も出土していることから擾乱を受けているものと判断した。当初の位置については不明である。鏡は破砕されたもので重さ17.5gである。



第92図 遺構に伴わない遺物実測図①



第93図 遺構に伴わない遺物実測図②



第94図 遺構に伴わない遺物実測図③

部位としては平縁の一部である。銅の質は極めて良好であり、光沢が残っていることから舶載鏡である。

290から304は縄文土器片である。後期の土器を主体に散発的に出土した。305は蛇紋岩の石斧である。刃部は潰れており、基部も剥離している。306も石斧の破片である。307は細身の石斧片である。刃部の一部であり長さは不明である。

308は形状的には甕棺であるが、焼きが硬く弥生時代のものではないようだ。時期は不明であるが、中・近世の可能性がある。309は甕棺で口縁部の破片である。310は甕の口縁部片である。311は小型の甕の脚台で312は甕の脚台である。313は甕の口縁部片である。口唇部は厚く断面が四角になっており外側に咬による刻み目を施している。314も甕で頸部から肩部の破片である。1条の凸帯を巡らし刻み目を配している。315は甕口縁部の破片で、「く」字に折れた口縁部に刻み目を配している。

316は頸部に櫛描状波状文を配した甕の破片である。一部に赤色顔料（ベンガラ）を塗布している。

317は甕の袋状口縁部破片である。

318は免田式土器の破片である。方保田東原遺跡では数少ない資料で、この時点ではここ大道小学校内に限って出土している。319は丹塗り甕の底部である。平底部分と内部には塗られておらず、外面のみに塗布されている。320は口縁部を欠いた甕である。321は甕と鉢の中間の形態である。322と323は小型の鉢の破片である。324は脚付鉢の脚部である。325と326は共に丹塗りの高杯の口縁部片である。全面に赤く塗布している。327は底部のみの破片であるが、内面に赤色顔料の付着が見られる。

328は高杯の脚部の一部である。杯部との間に1条の凸帯を巡らしている。329と330も高杯脚部の破片である。330も杯部との間に2条の沈線配し、裾部近くに1個の穿孔を確認できる。331は小型の器台の破片である。332は特殊器台の破片である。上下の両端を欠いている。穿孔の部分と下段を6本の沈線で区画し、その間に大きな鋸歯文（連続三角文）を描いている。これまでに類例が無く、珍しい器台である。内面には土器を作った職工人の爪の痕跡が残されている（P L16-4）。333も器台である。334は免田式土器の甕の破片である。335はジョッキ形土器の把手の破片である。

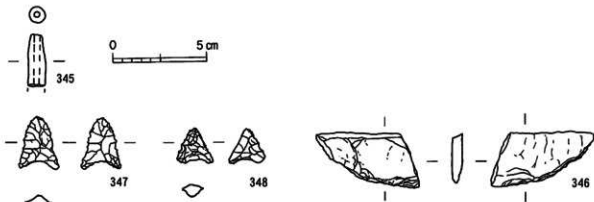
336は土器溜めの中から出土した鉢である。土師器の特徴の器面とへら削りが見られる。337は土師質の土鍾である。338は近世以降と思われる資料である。339も時期の判断が出来ない土製品である。円柱形の把手のようにも見える。

340は須恵器の縁の破片である。341も須恵器で甕の破片である。342も須恵器の甕の破片である。343は須恵器の大甕の破片である。これらは何れも格子目の叩きを施している。344は瓦質土器の撞鉢片である。

345は土師質の土鍾である。

346は変成岩製の石包丁未製品である。粗く形状を整えている段階で折れたものである。347と348は石鏃である。

赤色顔料が付着した所謂内面朱塗り土器は破片であるが20点を確認することができる。鉄器としては大型の鉄鏃が出土している。



第95図 遺構に伴わない遺物実測図④

3 考察

家形土器の持つ意味について

家形土器の特徴は本文で述べた。弥生時代後期の建物には竪穴住居が高床式の倉庫程度が考えられるが、これらのものを単純に模倣するのだろうか？という疑問が生じるのである。仮にそうであるとすればもっと多くの家形土器が発見されても良いのではなかろうか。

家形土器はこれまでに全国で7点、土製品2点を加えても9点に過ぎないとされている。²³

僅か9点しか出ていないとすればもっと特殊な建物を表現したものであろうと考えるのが妥当である。

扉の形状を忠実に表現しているところから家全体もかなり写実的に表現しているものと判断できる。となれば、現実存在している家を模倣して作ったことになり、誰のための家かを考える必要があろう。

沖縄本島にかつて高床倉庫が作られていたが、今日では資料館や博物館の一角に移転復原されている。これを目にしたとき、この倉庫の扉が家形土器の扉に似ているのに気付いた。観音開きの扉には外側に取っ手を付け門穴が設置してある。内側からは門や鍵はかからないのである。そもそも鍵をかけた門を差し込んだりするとは、人が生活している住居の場合には人の居る内側から施錠するのであり、城郭の場合も同様に、門の巨大な門は内側に作られており外敵の侵入を防ぐ役割を果たしている。

沖縄の倉庫は人が居ることが無く物資や米が入れるため外からの侵入を防ぐと共に中の物資があふれたりこぼれ落ちたりする事を防いだものである。

家形土器の門が外側に着いていることは家形土器が倉庫としての役割を果たしたとも考えられるが、当時は高床倉庫の存在があり、あえて土器で模倣する理由が見出せないものである。

したがって、この家は内部に絶えず人が入って生活しているものではなく、特別な人物しか中にいることが出来ない建物で、一定の期間を過ごしたものと考えられる。

以前触れたようにこの家形土器のモデルとなった建物は、祭祀者が籠もって神のお告げや声を聞くための

空間であり、神と人との間を取り持つ役割を果たすために重要な施設だったのではないか。特に注目したのは、建物の構造で梁間2間、桁行き2間で、入り口は正面右側に付けられ、柱間の貫材もあるという点である。この造りは、島根県内でしかみられない大社造りと類似しているのである。²⁴

大社造りとしては有名な出雲大社や神護神社（共に国宝）が存在している。

弥生時代倭国大乱後、権力者と祭祀者の力が増大し、権力の誇示に利用したのが神としての神殿の建設であり、その後権力の象徴として大型化したのが出雲大社等の巨大な建築物である。このような例としては古墳時代においては古墳などの墳墓であり、奈良時代では寺院建築である。

家形土器のモデルは祭祀者の籠もる家から神の宿る家へと変化し家そのものを神とした神殿が存在していたものを模して作ったものと考えられる。

この家形土器は、建物を神の宿る家として民衆から引き離し権力と宗教を結びつけた表れであろう。

註10 平成12年6月13日～14日 読売新聞西部本社文化欄

註9 『鳥居松遺跡3次調査』浜松市文化協会 2002年

写 真 图 版



1 体育館東区全景



5 2号墓棺出土状況



2 体育館内部（南側）



6 3号（右）・4号（左）墓棺出土状況



3 体育館内部（北側）



7 4号墓棺出土状況



4 1号墓棺出土状況



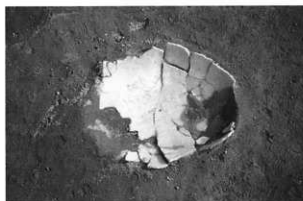
8 5号墓棺出土状況



1 6号墓出土状況



5 11号墓・木棺墓上面検出状況



2 8号墓出土状況



6 11号墓出土状況（南から）



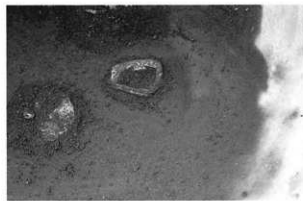
3 9号墓出土状況



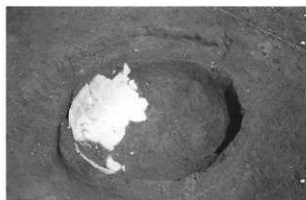
7 11号墓出土状況（東から）



4 10号墓出土状況



8 11号墓内貝輪出土状況



1 12号墓出土状況



4 1号住居跡



2 13号墓出土状況



5 3号住居跡と5号墓



3 木棺墓



6 1号土坑



7 2号土坑



1 3号土坑



4 2号溝上面



5 大道小学校に保管されていた方格規矩鏡



2 1号溝



6 3号甕棺 2



3 1号溝・2号溝合流点



7 3号甕棺出土遺物 3~10



1 4号壺棺 (上壺) 11



5 7号壺棺 18



2 4号壺棺 (下壺) 12



6 10号壺棺 (上壺) 21



3 5号壺棺 15



7 10号壺棺 (下壺) 22



4 6号壺棺 17



8 11号壺棺 (上壺) 23



1 11号甕棺（下甕） 24



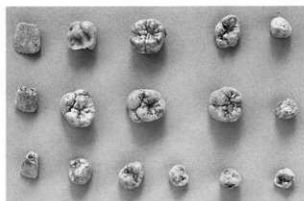
5 13号甕棺（下甕） 29



2 11号甕棺出土貝輪 25



6 細石核 115



3 11号甕棺出土齒



7 細石核 116



4 13号甕棺（上甕） 27



8 青銅鏡片 98



1 1号溝出土遺物 69



5 2号溝出土遺物



9 1号土坑出土遺物 45



2 1号溝出土遺物



6 2号溝出土遺物



10 2号土坑出土遺物 58



3 2号溝出土遺物 81



7 3号住居跡出土遺物 34



11 遺構に伴わない遺物 95



4 2号溝出土遺物 77



8 1号土坑出土遺物 43



12 遺構に伴わない遺物 96



1 紡錘車 114



5 縄文土器



9 青磁



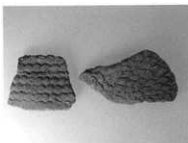
2 紡錘車裏面 114



6 縄文土器



10 青磁



3 縄文土器 161, 162



7 白磁 130



11 土師皿



4 縄文土器



8 白磁 131



12 播鉢

遺構に伴わない遺物



1 平成10年度ブル調査区全景



2 調査区南側



3 調査区北側



4 土器溜め全景



5 家形土器 扉出土状況



6 家形土器出土状況（東から）



7 家形土器出土状況（上から）



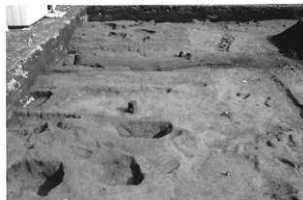
1 1号土坑出土状況



5 溝状遺構（南より）



2 2号土坑遺物出土状況



6 溝状遺構（西より）



3 3号土坑遺物出土状況



7 溝状遺構（北より）



4 4号土坑出土状況



8 青銅鏡片出土状況



1

202



5

220



2

210



6

222



3

215



7

224



4

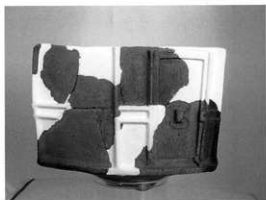
219



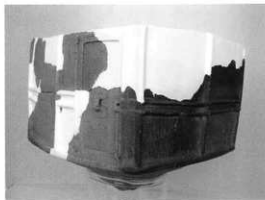
8

225

土器溜め上層出土遺物（家形土器周辺）



1 正面



5 右斜面



2 右側面



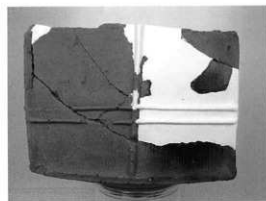
6 内面



3 裏面



7 内面コーナー



4 左側面



8 下面

土器溜め下層出土遺物（家形土器）226



1

234



5

238



2

236



6

241



3

237



7

242



4

238



8

294

土器溜め下層出土遺物（家形土器周辺）



1 再生土製品 250



5 瓦質土器 254



2 砥石 251



6 土師皿
1号土坑出土遺物 256



3 石斧 252



7 高坏 270



4 石包丁
土器溜め下層出土遺物 253



8 石鏃
2号土坑出土遺物 279



1 軽石
2号土坑出土遺物



2 288
4号土坑出土遺物



3 青銅鏡片



4 縄文土器



5 縄文土器 302, 296, 304



6 縄文土器 303



7 石斧 305



8 石斧 306

298 遺構に伴わない遺物



1 壺 320



6 338



11 石鏃 347



2 丹塗土器 319



7 土製品 339



12 石鏃 348



3 特殊器台 332



8 土製品 339



13 内面朱塗土器



4 爪の痕跡 332



9 瓦質土器 343



14 内面朱塗土器



5 重弧文 334



10 石庖丁未製品 346



15 内面朱塗土器

遺構に伴わない遺物

報告書抄録

ふりがな	かとうだひがしばるいせき
書名	方保田東原遺跡(7)
副書名	山鹿市文化財調査報告書
巻数	第2集
シリーズ名	
編著者名	中村幸史郎
編集機関	山鹿市教育委員会
所在地	〒861-0501 熊本県山鹿市山鹿1026-2
発行年月日	平成18年12月1日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	道路番号					
かとうだひがしばるいせき 方保田東原遺跡	くまもとけんやまがし 熊本県山鹿市 かとうだ 方保田	43208	179	32° 59' 53"	130° 42' 42"	平成4年5月21日 から8月22日	1,250㎡	大道小学校 体育館改築
	種名	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
	包蔵地	弥生時代、中世		竪穴群、溝状遺構		竪穴、青銅鏡片		

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	道路番号					
かとうだひがしばるいせき 方保田東原遺跡	くまもとけんやまがし 熊本県山鹿市 かとうだ 方保田	43208	179	32° 59' 52"	130° 42' 45"	平成10年9月9日 から11月12日	720㎡	大道小学校 プール改築
	種名	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
	包蔵地	弥生時代		土器溜め、土坑、 溝状遺構		家形土器、舶載鏡片		

山鹿市文化財調査報告書第2集

方保田東原遺跡 7

平成18年12月1日

編 集 山鹿市教育委員会文化課文化財係

山鹿市方保田128

山鹿市出土文化財管理センター内

発 行 山鹿市教育委員会

山鹿市山鹿1026-2

印 刷 ㈱城野印刷所

益城町広崎1630-1

正誤表

『方保田東原遺跡(7)』 山鹿市文化財調査報告書 第2集 熊本県山鹿市教育委員会2006年

文中

頁	左右	行	図番	誤	正
79	左	13		𦵇	ヘラ

文化財調査報告の電子書籍の末尾に挿入する奥付

この電子書籍は、『山鹿市文化財調査報告第2集 方保田東原遺跡7』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

なお、平成17年(2005)に山鹿市、鹿北町、菊鹿町、鹿本町、鹿央町が合併し山鹿市となりました。調査記録及び出土遺物は、山鹿市教育委員会が保管しています。

書名：山鹿市文化財調査報告第2集 方保田東原遺跡7

発行：山鹿市教育委員会

〒861-0592 熊本県山鹿市山鹿 987 番 3

電話：0968-43-1651

URL：<https://www.city.yamaga.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2025 年6月 19 日